

國語研究會編纂

修訂中等國語讀本字解

第一二學年用

教育研究會編纂

訂修

中等國語讀本字解

第二學年用

45. 5. 2

內容

訂修 中等國語讀本卷三目次

一	列聖遺芳……………	一
二	高山彦九郎……………	四
三	櫻……………	七
四	星と花……………	一〇
五	讀書の樂……………	一一
六	わが幼時……………	一二
七	おのれを屈せよ……………	一六
八	良雄の僕……………	一八
九	孝道……………	二二
一〇	舊師に贈る……………	二四
一一	アレキサンデル大王の逸事……………	二七
一二	日本海の大戦その一……………	三〇
一三	日本海の大戦その二……………	三四
一四	生存競争……………	三七
一五	奮闘……………	三八
一六	伊能忠敬の晩學その一……………	四一
一七	伊能忠敬の晩學その二……………	四四
一八	時……………	四七
一九	南極探險その一……………	四九

二〇	南極探險その二	五一
二一	端艇につきて友人に贈る	五二
二二	農業の快樂	五四
二三	レッシングの比喩譚	五七
二四	殊勝なる武者振	五九
二五	流泉啄木	六三
二六	佐久間大尉	六五
二七	わが小園	七二
二八	ポアツナードを送る詞	七五

訂修 中等國語讀本卷三目次終

訂修 中等國語讀本卷四目次

一	忠君愛國	七九
二	自國語	八四
三	愚公の山	八六
四	四明山下の卜居	八七
五	蘇武	八八
六	冒險心	九一
七	ペスピオ	九五
八	歐米人の氣風	九八
九	ポートサイドより	一〇二
一〇	新聞紙	一〇五

二	模範村長歡迎會	一一〇
三	農人形	一一五
三	人の一生	一一九
四	植物の景觀と氣象との關係その一	一二一
五	植物の景觀と氣象との關係その二	一二五
六	品性	一二九
七	運命その一	一三三
八	運命その二	一三八

一九	水の聲……………	一四〇
二〇	朝鮮の風俗……………	一四一
二一	金吾秀秋……………	一四四
二二	桃山時代の工業……………	一四九
二三	職業の選擇……………	一五一
二四	南京の壺……………	一五三
二五	鴻門の會……………	一五六

訂修 中等國語讀本卷四目次終

訂修 中等國語讀本卷三

一 列聖遺芳

- 【物見車】モノミグルマ見物にのりて出る車。
- 【御性】オんサガ「おんうまれつと」といふ事。
- 【剛健】ガウケン 精神のつよくたつしやなること。
- 【嚴明】タンメイ 命令などが、きびしくして明かなること。

- 【ましましけり】あらせられた。
- 【東宮】トウグウ 皇太子のこと。
- 【世故】セコ 世間の俗事。
- 【練熟】レンジョク 事になれて、よくとこのうてをること。
- 【政務の得失】セイム トクシツ 政治を行ふ上の方策の、利あるところと不利なるところ。
- 【辨へ】ワキマ よく辨別すること。(知りわける)

【精を勵し】セイをリシ ころろをばびむやうにする。(せいをだすこと)。

【百方】ヒヤクハウ いろいろと。

【治を圖る】チをツグ まつりごとをよよくゆきわたらするやうにすること。

【外戚】ケイセキ 母方のしんるゐ。

【專横を極め】センワウをキョク わがまをとおもふまゝにする。

【華奢】カワシヤ はなやかにかざりてせいたくなること。

【風を成し】フウをナ 風俗となること。

【淫猥】インライ みだらなること。

【俗を作す】ソクを作ス 習慣となること。

【率先】ゼンゼン 人々のさきにたつて下をひきあふる。

【前代】ゼンダイ まへの代の天子、即ち後冷泉天皇の御代をいふ。

【進貢】シンシ 諸國より朝廷へ奉る土産の物。(にへ)。

【藍紙】アイシ あるいろの紙。

【胡椒】コセウ 熱帯地方の植物にして、果實は食用となる味辛し。

【石清水の行幸】イハシメジ 石清水の八幡宮へみゆきしたまふこと。

【途次】トジ みすすすから。(途中)。

【鹵薄】ロホ 天皇行幸の際に於ける行列。

【都人】トジン みやこのひと。

【鸞輿】ランヨ みくるま。

【賀茂の行幸】カモ 加茂の神社へみゆきしたまふこと。

【頓に】トビ 俄に。(急に)。

【賞翫】シヤウクワン めでもてあそぶ。

【野分の風】ノフキ 九月頃の暴風をいふ。(秋より冬にかけて吹く暴風)。

【殿守】テンモリ 禁中の供御、殿庭の

掃除燈燭などをつかさどる役。

【仕丁】シチヤウ 禁中の掃除などの、さうやくに使はる者。

【朝清め】アサキヨ 庭などをあさ早くはき清むること。

【奉行の藏人】フギヤウ 上の御命をうけて、事を行ふ藏人の官に居る人。

【罪科】サイクラ つみとが。

【懼れ畏み】オソレカシ おぶおぶして、おそれ入つて居ること。

【風流】フウリウ みやびたるさま。

【叡感】エイカン 天子の御感に入るこ

【御心地勝れさせ給はず】御氣分が
あしくいらせらるる事なり。

【いひがひなく】口をそへていふか
ひなきこと。(ふがひなし)。

【克己復禮】己れの私欲をはらひ
つくして、天理自然の禮文に従ひ
てふみ行ふこと。

【豁然】クラッセン くわらりと、うち
ひらけたるるまじらふ。

【凄じく】ものぢふおこるる。

【端坐】マンザたゞしく坐すること。

【神色自若】シムシヨクシマヤク かほい
るが常の通りにてかはらざるこ
と。

二 高山彦九郎

【總髮】ソウハツ さかやきをそらす。
全體髪をのばして、項にて束ぬる
こと。

【歴代】レキダイ だいたい。

【諱】イミナ 實名のこと。

【山陵】サンリョウ みさくら。

【譜記】アンキ そらでおぼえる。

【奇事異行】キジイギヤウ 常のものど
はかはつた事や、ことなつたおこ
なひ。

【學制】ガクセイ 學校の制度。(規則)。

【規約】キヤク 互に申合せて定めたる
約定。

【北郊】ホクカウ 北の方の城下はづれ。

【相識】サウシキ しりあひ。

【節季】セツキ 一年の時節の季の意に
て、十二月の稱なり。(としのくれ)

【年内】ネンナイ 年の内といふことに
て年の明けない内の意。

【内侍所】ナイジツドコロ 朝廷温明殿内に
あり、模造の神鏡を祭れる所。

【御神樂】ミカグラ 神の心をなぐさめ
たてまつる爲の奏樂なり。

【酒錢】サカテ 酒のみしろ。

【慮外者】リョウガイモノ 「ぶれいなや
つめ」の意。

【舌を捲く】いたくおごろく様にい
ふ語。

【百姓一揆】ロヤクシヤウイツキ 百姓の
徒黨をくみて、騒動をおこすをい
ふ。

【路程】 ロテイ みちのり。

【歎稱】 タンシヨウ ほめたゝへる。

【偉人】 キジン 大いなる人物といふこと。

【村吏】 リンリ むらやくにん。

【旗本】 ハタモト 徳川氏時代に、將軍直參の士にして、知行一萬石未満百俵以上のものゝ稱。

【名主年寄】 ナヌミトシヨリ 今の村長助役などいふ名譽職にあたる。

【領主】 リヤウシユ 土地を領して居る主。

【不審の者】 フシンモノ あやしき者の意。

【虚日なし】 キヨジツ 毎日毎日といふ程の意。

【大府】 タイフ 幕府を云ふ。

【有司】 イウシ 官吏のこと。

【仔細】 シサイ いちぶしじゆう。(こどわけ)。

【武者修行】 ムシヤシユギヤウ 武術を以て、諸國を遊歴するものをいふ。

【辯舌あざやか】 ベンゼツ あははがはつきりすること。

【誣ひし】 シウヒシ なまごころをさつくりて、ありごといふこと。

【當途】 タウト 世にありて政をとつて居ること。

【便なき事に思ふ】 マユリ たよるべきものがなにと云ふ事。

三 櫻

【國花】 コククラ 國を代表した花といふ意。

【雲とまがひ】 クモかど見あやまる。

【特有】 トクイウ とくべつにもつてあることいふこと。

【濃艶な粧】 ノウエン ヨソホヒ いろがこくして、あで

やかなること。(こつてりしたすがた。)

【趣味】 シユミ 人の感興をひきおこすべき心の上の作用。

【艶冶の態】 エンヤ なまめかしくして、うつくしむること。

【清楚】 セイソク よくして、さつぱりとしたること。

【野趣】 ヤシユ 作らず飾らず、自然にそなはれるおもむき。

【あつさり】 しつこくなまごころ。

【大宮人】 オホミヤヒト 宮中に奉仕す

る人。

【楚楚とした野情】あざやかにして
あつさりした、自然のまゝなるか
ざりなきおむもぎ。

【二十日草】ハツカグサ 牡丹の異稱な
り。

【どにかく】なにせよ。

【雪と降る】ちる花を雪と見たて、

云へるなり(雪の如くにふき散る)
【一段の風趣】いつさうまさつたお
もむもぎ。

【言語に絶す】言葉にはいふべきこ
と。

どばがない。

【花ぐはし】花うつくしといふ語に
て、櫻の上におく枕詞なり。

【どんより】雲うすく空をおほひて、
風なくしづかなること。

【花曇】ハナゲモリ 櫻花のさく頃、空
の晴れざること。

【朧月夜】オホロツキヨ ほんのりとか
ずめる月夜。

【ふさはし】相應して居る。(似合つ
てをる。)

【特色】トクシヨク 他にすぐれてきは

だつありさま。

【駘蕩】タイタウ 春景色ののどかなる
こと。

【温和】ワンア あたゝかにおだやかな
こと。

【峻厳猛烈】シユンゲンマウレツ 非常に
さびしく、勢のはげしきこと。

【きは立つ】めだつ。(他との區別の
はつきりしたること。)

【吉野山霞の奥は云々の歌】これは
八田知紀の歌なり。「吉野山に来て

見ると、霞のかゝつて居るおくの
方の、目のとゞかない所のさまは
わからないけれども、目のとゞく
限りは、ごこを見ても櫻でない所
はない、満山皆櫻を以てみたされ
て居る。」と云ふ意なり。

【花の雲云々の俳句】これは芭蕉の
作なり。「何心なく庭に出て、ご
んよりとした花曇の空をながめつ
ゝ、上野向島などの花は如何にと
思ひやるときしもあれ、鐘のこゑ
のひびきわたれるに、あれは上野

かそれとも淺草か。と思ひはかれ
るまゝをよみたるなり。

【光景】クワツケイ ありさま。

【愛でる】いつくしみ愛すること。

【花の世界】花ばかりてとりかこま
れたる世の中の意。

四 星ご花

【おなじ自然の云々】おなじ天地間
の萬物をつくつた。造物主ゼラフツシユの手
に育つた。」と云ふ意。

【かれとこれとに云々】天上の星と

地上の花との隔りはあるけれども
の意。

【にはひはおなじ云々】つやゝかな
る様子は、星も花もおなじであ
る。」と云ふ程の意。

【ゑみと光をよひよひに云々】地上
の花の開きて居るのと、天上に光
を放つ星とが、毎夜毎夜光とゑみ
とを交換カウクワンしてをると云ふこと。

【あけぼの】ほんのりとあけかゝる
時。

【御空イソラの花のしほむ時】天上の花と

もみゆる、星の光のきゆるとき
の意。

【見よ白露の云々】とらんなきい、白
露のひとしづくを、地上の花の上
におくのは、あれはこの世界をて
らせる、星の涙であるよ。」と云ふ
意。

五 讀書の樂

【いつをもわかず】いつといふ區別
はないと云ふ意。

【經傳】ケイテン 聖人の言ひたること

ばや、これに註釋チュウシヤクを加へたる後の
賢人の、のべたる言葉をかきたる
もの。

【まのあたり】目の前にの意。

【聖賢】セイケン 聖人賢人と云ふこと
にて、聖人は其智其徳共に神の如
くにして測られざるものを云ひ、
賢人とはこれに次ぐ智徳ある人を
云ふ。

【いふべくもあらず】いはふにもい
はふやうがない。

【狄仁傑】テキジンケツ 唐の世、中宗の

とまの宰相なり。

【名教メイキョウのうち云々】道德の教、即ち君臣父子兄弟夫婦朋友長幼等の間、各名目ありてみだるべからざる教の中、しぜんとさいげんのない樂があるものだ、何の世間の俗人と話しあふ必要があらうか、ありはせぬの意。

【ちんじちん、覺ゆ】もつともなること、思ふの意。

【書案】シヨマン、しんぎの、こと。

【くち惜し】さんねんなりの意。

【その憾ウラミ】残念さ。

【向はまほし】向つてゆきたい。

六 わが幼時

【草紙】サウシ 冊子サクシにて綴本トチホンの意なれば、書物といふことなり。

【火燧】コタツ 爐を切りやぐらをおきふとんをかけて足など暖むること。

【腹這】ハラバヒ うつぶしになつて居ること。

【透寫】トウシヤ すきうつしとすること。

こと。

【物讀む師友】ものをよむ師とも友ともなるやうな人と云ふ意。

【往來物】ヤウライモノ 日用文などをあつめたるもの。

【戸部】モホウ 民部の唐名ウツナイなり。其主土屋侯民部少輔シホなりければ、戸部といひしなり。(こ、は唐音にて「こほう」とよむをよしとす。

【家人】ケニン けらい。

【太平記評判】タイヘイキヘウバン 太平記中の兵事を評論したるもの。

【聽聞】チヤウモン ちんぐん、こと。

【侍る】そばに居ること。

【その義を請ひ問ふ】はなしのすぢ目又はわけを聞くこと。

【奇特】キドク つねなみのものにすぐれて、賞すべきことと云ふ意。

【文字などありけるが】文字を知つて居つたがの意。

【七言絶句】シチゴンゼツク 七言を以て一句となしたるもの、四句よりなる詩の一體なり。五言絶句に對して云ふ。

【誦をなす】そらでよむこと。

【頑なる昔人】頑固な老人。

【利根】リコン 心根のすぐれて利發なる人。天才あるもの。

【氣根】キコン 根氣づよきこと。(忍耐心のつよきこと。)

【黄金】ゴウゴン かねといふことにて資本の意。

【學匠】ガクシヤウ 學者のこと。

【心得られず】何ともわからぬ。

【御いづくしみ】御寵愛といふこと。

【御側を離れたまはねば】君侯の「お

こしやう」をつとめて居つて、常におはなしなさらないからしてといふ意。

【協ふべからず】できない。

【せめては】できるものならばむりにでもの意。(ならうことならば。)

【課を立て】分量を定めての意。

【堪へ難く】しんばうがたまされな

い。【しばし程經ぬれば】しばらく時間

がたつと。【大やうは】あらましはの意。

【課を充てたり】十分に、定められたることをなしをはること。

【かたの如くには】きたり【うはべの形式だけはかいたといふこと。

【庭訓往來】テイクンワウライ 十二月往復の書簡文集なり。

【淨寫】ヤヤウシヤ 清書におなじ。

【冊になす】綴りて冊子とすること。

【贈答】サツタウ やりととりすること。

【太刀打】タチウチ 太刀にてうつ意にて、今のげつけんのことなり。

【わぬし】お前とらぬし。

【さこそは侍るべけれど】さうではあらうけれども。

【刀脇差】カタナワキザシ 大小といふにおなじ。刀は長くして脇差は短きを以ていふなり。

【不用のことにも】用にもたつないことではないかの意。

【ことわり】道理にあたつてもつと

【藝を試む】わざだめしをすること。

【心にも染めず】心にしみこまない。(ふかくおもひこまぬこと。)

七 おのれを屈せよ

【老儒】ラウヤユ 老しをりたる學者。

【訪れ】オヒツク たづねて行く。

【心ちよげに】心もちよさるうに。

【何くれと】何につけかにつけて。

【鴨居】カモキ 戸障子などたつる上の横木。

【年少氣鋭】ネンセウキエイ 年がわかくて氣のかつた。

【快談】クワイタン こころよきはなし。

【意氣頗る揚れる折】イキアガ こころいきが、

たかぶつてうはちやうしになつてをる時。

【心づかで】心づかずして。

【耳に入らばこそ】耳に入らうかい。

【心して】心をつけて。

【身邊をかへりみず】身のまはりを何ともおもはず、むごんぢやくにすること。

【不測の禍】フソクノガハレ 思ひもよらない不幸。

【板上に玉を走らしむ】板の上に玉をころがすやうなもので、きはめてあやうきことをいふ。

【おのれを屈す】自分の身をけんぞんして、人に服従すること。

【成業の期なけん】事のなしとげらるゝ時はないだらう。

【遺子】オシ わすれがたみ。(父を失つて、あとにのこれる子供。)

【邂逅】カイコウ ふいにめぐりあふ。

【意氣燃ゆるが如き】こころいきの、火のもえるやうにさかんなること。

【心裏】シムリ こころのうち。

【かうと】かくとにおなじ。

【止めんにも止め難く】とめやうにも止らない。

【あはや】いまにも。(あはやの意)

【心の駒云々】こころのくるひださうとするとき。

【無謀】ムボウ かんがへのなきこと。

【恩澤に浴したり】めぐみをうけたこと。

【才智を恃み】おのれのはたらきをたよりにして。

【猛進】マウシン いきおひつよすすむ。

【客氣の振舞】カウキ フルマヒ うはまにはやるしわ
ま。(一時のはやり氣。)

八 良雄の僕

【冴えたる月影】サエタル ツキカゲ すみわたりたる月
の光。

【同勢】ドウセイ ドウセイ 一味徒黨のもの。

【火事装束】カシゾウゾク クラッシュソウゾク 火事場に
出るいでたち。

【身を固め】ミヲカケ 身仕度をげんぢうにす
る。

【浪士】ラウシ ラウシ 主人をもたぬ士。

【本望を遂げ】ホンボウヲスグ もとよりののぞみを
なすとげる。

【引き上げ】ヒキアゲ 人数をまとめて去る。

【噂】ウソ ウソ 世間のふうぶん。

【評判】ヒヤウバン ヒヤウバン 世間のとりどりの
うはま。

【一族】イチゾク イチゾク みうちのもの。

【指揮】シキ シキ さしづ。

【通稱】ツウシヨウ ツウシヨウ 世間普通によぶ名。
(とうり名。)

【立居振舞】タチキフルマヒ たつたりす
わつたりさまざまのしわざ。

【經學】ケイガク ケイガク 聖人のたてゝおかれ
たる學問をけんきうする學。

【兵法】ヘイハツ ヘイハツ 兵を用ゐるみち。

【日頃の厚遇】ヒゴロノコウユウ つねからの おてあつ
きのおもてなし。

【謝し奉るに辭なし】シヤタテマツ おれいを申上
ぐるにそのことばがない。

【心腹を傾け】シンブツヲカカム こゝろのそこをうち
あけて。誠心を以て。

【庸器】ヨウキ ヨウキ 平凡なる人物。

【大事に堪へん】ダイジニカンヘン 國家の一大事をし
おつて立つに、それだけのことを

やりとげる力があるであらう。

【狼狽】ラウバイ ラウバイ うろたへること。

【周章てたる色】シュウチャウ おどろさまざまへる
かほつき。

【處理】シヨリ シヨリものごとをとりさば
く。

【流るゝが如し】ナガレノコトノトシ とゞろにほるところ
なく、すらすらとやつてのける。

【器重】キリヤウ キリヤウ ものごとのやくにな
つべき才能。

【心服】シンブツ シンブツ こゝろのそこから服
従す。

【進退を二任す】かけひをさすて

まかす。

【明け渡し】開城して引きわたすこ

ら。

【離散】リサンちりちりばらばらにな

ること。

【洛東】ラクトウ 京都の東。(京都の事

を洛陽と云ひ、鴨川のことを洛水

と云ふ。)

【老僕】ラウボク 年とりたるめしつか

ひ。

【暇乞】イトマギヒ わかれをつぐるこ

ら。

【せめては】ならうことなら。

【形見の一品】おもひでのたねとす

べの一品。

【騒動】サウドウ めわぎ。

【途方にくれぬ】如何ともせんすべ

なく、てだてにまよふ。

【仕官】シクワン やくにつく。

【やすらかに】しんばいなく。

【實義】シツギまこところをこめて正直

い。

【奉公】ホウコウ主人につかへること。

【心に任せず】心に思ふやうにもな

らない。

【せめては】たつて。

【老いぼれ】おいくちたること。(老

老)

【丈夫の御心】男子らしきしつかり

した心。

【恨を吞む】くやしきをむねのうち

にもちこたへて。

【最期】サイゴいのちのをはり。(死ぬ

ること。)

【下郎】ゲラウ 人にめしつかはるゝほ

【胸も湧きかへる】むねがにへかへ

るほどはらたしいこと。

【腰拔待】ヨシメケザムラヒ

いさざちなま

さむらひ。

【城主】シナウシユ 城をもちたる主。

【ばらばら】なみだなどのおつるさ

まにいふ語。

【憤を收め】はらだち心をなほす。

【筆の迹】かきたるもの。

【賤が伏家】いやしきものゝ地にふ

したる如きひくき家。

【かしづき】 つきとひまもる。
【ながらへて】 いのちをたもつ。(存命。)

九 孝 道

【一舉一動】 イツキヨイチダウ ひとたび手足をあげ、ひとたび身をうごかす。

【逆境】 ギヤクキヤウ ふしやはせのまはりあはせになつたとき。(失意の時。)

【順境】 シンニキヤウ 萬事しやはせの時。

よきまはりあはせ。(得意の時。)

【理想の孝】 われわれの具有せる正義の智能によりて想像して、到達せんとする最終の目的、即ち吾人の智能によりて考へて、完全なりとする、最終の目的たる孝と云ふこと。

【聖の教】 聖人のをしへ。

【徳に服す】 人の行ふべき道にかなひたる、なすけある政になつきしたかふ。

【御意あり】 おほせらるゝといふ事。

【畏り奉る】 しょうちいたしましたの意。

【所望】 シヨマツ のぞみねがふ。(このみ。)

【後目】 シリメ目づかひしてうしろをにらむ。

【えも盡し給はじ】 のみつくしておしまひなされることはあるまじの意

【資性】 シホイウまれつき。
【温良】 チンリヤウ おだやかにしてすなはなること。
【四鄰】 シリンしはうごなり。

【青年】 セイネン としわかきもの。

【模範】 モハンてほん。
【表彰】 ヘウシヤウ いひたてゝあらはす。

【喘息】 センソク 氣管支に起る一種の病。(せきをしてたんをはく病。)

【痼疾】 コシツ 久しくしていえざる病。(ぢびやう。)

【榮養】 エイヤウ からだの養となるべき滋養分。
【四肢】 シシ 手足のこと。
【至情】 シシヤウ 情のきはみに達した

るまごころ。

【虚偽】 キョギウはべばかりのいつはりごと。

【虚飾】 キョシヨク うはべばかりのかざり。

【熱誠】 ホツセイ心を一心にこめたるまごころ。

【熱情】 ホツシャウ もゆるばかりに心をこめたるじやう。

【輕薄者流】 ケイハクシャリウ まごころのうすきものゝたぐひ。

【樹静ならうと欲す云々】 木がしづ

かにうごくまいとおもつても、風がやまなければしせんと動かなければならない。子はおやに孝をつくしたいと思つても、親が居なければ孝をつくすことを得ないといふこと。

【至大恨事】 シタイコンジ きはめておほひなるざんねんなること。

一〇 舊師に贈る

【今回】 コンクワイ このたび。

【看護】 クワンゴ 病氣をみまもりてせ

れをする。

【轉任】 テンニン他のしよくにかはる。

【同情の至】 他ドウジヤウの境遇イカリをおもひやるのしごく。

【高年】 カウホン としを取つて居ること。

【十二分】 シフニブン 十分の上にもなほてをつくす。

【境遇】 キヤウグウ 身のまはりあはせ。

【一生涯】 イツシヤウガイ うまれきてより死に至るまで。

【最大悲歎】 サイダイヒタン もつともお

ほひなるなげき。

【療養】 レウヤウ やまひをれうじして養生する。

【無常を感じ】 生死の定めなきことをふかく心におもふ。

【今生の生活】 現在の世にゐてくらすこと。

【生者必滅】 シヤウジヤヒツメツ 生あるものはかならずほろぶ。

【天理】 テンリ しせんにさだまれる道理。

【諦め】 おもひきる。

【家計】カケイいへのくらしむぎ。

【豊に相成り】ユタカおそくなまきほどにな
る。

【鴻恩】カウオン おほひなるおん。

【忽焉】コツエン たちまち。

【斷腸】ダンチャウ はらわたもちぎる
ばかりのかなしみ。

【創設】サウセツ はじめてまうける。

【盡力】ジンリョク ちからをつくす。

【周旋を添うす】シウゼン カタジケナ
て、世話をうけたことがありがた
い。

【遠隔】エンカクをほかけいだたる。

【公務】コウム おもてむぎのつとめ。

【儘からず】おもふまゝにならぬ。

【微衷】ビチュウ おもつてをる心の
うち。

【了察】レウサツ さとりあつす。

【潜水艇】センスイテイ 水中をちぐつ
て敵を襲撃する艇。

【經驗中】ケイケンチュウ ためしてをる
うち。

【放念】ハウネン あんしんすること。

【昇任】シヤウニン 官位ののぼること。

【祝詞】シツシよろこびのことば。

【往復】ワウフク ゆきかきすること。

一 アレキサンド

ル大王の逸事

【功名心】コウメウシン 功名を求むる
心。

【弱冠】ジャククワン 二十歳をいふ。

【功名心に驅られ】コウメイシンニカ
られて、おひたてつかはる。

【荐に】シキリ いやがうへにかさなりつど
く。(しばしば。)

【餘地】ヨチ あまれるばしよ。(ゆと
り。)

【掌大の地】テのひらほどの大きさの
地。

【大志をみたす】大なる志をまんど
くさせる。

【銳鋒】エイホウ するどきはし。

【馬蹄に委し】バテイニイ とうまのふみにじるま
ゝにまかす。

【史傳】シデン 歴史傳記。

【興味】キョウミ おもしろみ。

【光彩】クワウサイ はえあるひかり。

(きはだちたるひかり。)

【逸事】 イッジ世の中にあらはれざる
事柄。

【譯出】 ヤクシニツ ほんやくしてだす。

【一斑】 イツパン 一部分といふこと。

【全豹】 センハツ 全體といふこと。

【征服】 セイフク せいばつしてしたか
はせること。

【慄ひ戦く】 がたがたふるふこと。

【快復】 クワイフク こころよくもとの
身にかへる。

【侍醫】 シイ 王のおそば近く伺候す

るいしや。

【心まめなる】 忠實につとむること。

【病革れる】 病の次第にすすんで死
の近くなるをいふ。

【心を惱し】 おもひわづらふ。(心を
いためること。)

【最後の手段】 最終のてだて。

【萬一に決せむ】 成るかならぬかを、
萬に一つの中にさだめんとするを
いふ。(僥伴せんとの意。)

【危険を冒す】 あぶなきことをむり
からやる。

【信任】 シンニン 信用してことをまか
すこと。

【秘書】 ヒシヨ ひみつのでがみ。

【心を寄す】 おもひをよせて力をつ
くこと。

【由なき疑を解く】 理由もない疑を
はらす。

【邪正】 シヤセイ 心がよしまなるか、
たどしいか。

【立證】 リツシヨウ しやうこだてる。

【空しからず】 あだにはならない。

【病牀】 ビヤウシヤウ やまひのこと。

【赤心】 セキシン まこところ。

【大膽】 ダイタン 物におそれぬこと。

【畏敬】 キケイ おそれうやまふ。

【殊死】 シュシ 死物ぐるひになつてた
こと。

【當るべからず】 向ふへまはつては
をられぬ。

【進退】 シンタイ かけひき。

【さすが】 音にきこえたるもの程あ
つて。

【あはれや】 いたはしやまあ。

【少許】 セウキヨ すこしばかり。

【飲むに忍びず】のんでをるまがせぬこと。

【うなづき】がてんすること。(首肯)

【渴を醫す】かはきをなほす。

【同情の心】おもひやりのこと。

【感激】カンゲキ 心をうごかしてふるひたつ。

【水火をも辭すべけんや】水や火の中に入ることも、いやといはれやうかの意。

【旗下の士】はたもとの士。(親兵をいふ。)

【死に瀕す】死期のせまるをいふ。

【瞑目】メイモク 目をつぶる。

【光景に對し】ありさまにむかつて。

【感慨の念に打たれ】同情の心をうごかしなげく念がする。

【そぞろに】おもはずしらす。(何故ともなく。)

【暗涙】アンルキ 人知れず流すなみだ。

【咽ぶ】こゑをのぎにつまらせつなく。

一二 日本海の大戦その一

【天佑】テンイリ 天のたすけ。

【聯合艦隊】レンガフカンダイ 幾つもの艦隊より編制されたる艦隊。

【出現】シユツゲン あらはるし。

【上命】ジヤウメイ 大本營の命令の意。

【迎撃】ゲイゲキ むかへうつ。

【計畫】ケイクラク もくろみ。

【全力】ゼンリヨク 全艦隊の力。

【集中】シウチウ 一つどころにあつめる。

【豫定】ヨテイ あらかじめさだめる。

【哨艦】セウカン 艦の様子をていさつ

するものみのふね。

【配備】ハイビ てくばりして備へる。

【出動】シユツドウ いてはたらく。

【姿勢】シセイ ありさま。(やうす。)

【果然】クラゼン はたしての意。(おもつたごうり。)

【東水道】トウスギダウ 九州と對馬との間の水道。

【警報】タイホウ いましむるしらせ。

【踊躍】ヨウヤク おごりあがりてよろこぶ。

【對敵行動】タイテキカウドウ 敵に對す

るはたらき。

【航進】カウシン海を航しつゝすすむ。

【接觸を保つ】敵に近よりつゝ、その

はたらきをそのままを見失はざらんことをつとむるをいふ。

【濛氣】モウキ海上の水蒸氣。

【展望】テンバウみわたし。

【主力】シユリヨクおもなる力。

【右翼の先頭】右の方がはのはな

り。

【本職】ホンシヨク官吏などの自稱。

【心算】シンサン心づもり。

【皇國の興廢】クワウコクコウハイ日本國の勢がさかん

になるか、おそろへるが。

【奮勵努力】フンレイドリヨクふるひは

げみてつとむる。

【信號旗】シンガウキ味方に命令をつ

たへて、連絡をたもつたためにあぐ

るはた。

【壓迫】アツバクおしつけてせまる。

【戰策】センサクいくさのはかりごゑ。

【右舷】ウゲンみぎのふなばたの方角

【耐へ】うちかたをせずしてこらへ

てをること。

【猛烈】マウレツはげしい。

【竝航】ヘイカウならんで海上をゆく。

【效果】カウクラできあがり。

【須臾】シユエしばらく。

【旗艦】キカン司令長官の座乗せる

艦。

【戰列】センレツたゝかひの列。

【炎煙】エンエンもえあがるほのふや

けぶり。

【風に飄き】カゼタナヒ風に吹かれて横になが

く尾をひく。

【變鍼】ヘンシン航路をかへること。

【遁走】トンサウのがれわしる。

【拒し】おさへる。

【混亂】コンランいりみだれて、秩序

をうしなふこと。

【壯烈なる事蹟】サウレツををしくしてひか

りある行のあと。

【特記】トクキとくべつにかく。

【勇敢】イウカンおしきつてなす勇と

いふことにて、強くいさむこと。

【決行】ケツカウおもひきつておこな

ふ。

【彷徨】ハツクラウウろウろしてまど。

【搜索】 サツサク さがしもとむ。

【春き】 ツンツ 夕日の西の方におちてしまふ。

【傳令】 デンレイ 命を下につたへる。

一三 日本海の大戦その二

【千歳一遇】 センザイイチグウ 千年に一度であふ幸運と云ふこと。

【時機】 シキ ばあい。(をり。)

【風濤を肩し】 フウタウ オカ 風があつて、なみのたかさをおしきつて。

【先を争ふ】 セン アライ われがちに。

【蝟集】 キシフ 蝟ハリネズミ 毛シヅメの如くにあつま

【連続】 レンゾク うちついく。

【肉薄】 ニクハク きはめて近くせまつてゆく。

【激烈】 ゲキレツ きはめてはげしい。

【探照砲火】 タンセウハツクワ 探海燈タンカイトウにて照したり、砲火をはなしたりすること。

【攻撃に耐へず】 せめうつのにこらへきれない。

【僚艦相失し】 レウカン ともなつてをるふね

をみうしなふ。

【状態】 シヤウタイ ありさま。

【血路】 ケツロ 圍みたる敵の一方を。

【言語に絶し】 ゴンギョ ざりひらきてにびみちをあける。

【應接に違なく】 オウセツ イタイ へしらふひまがない。

【俯角の度】 フカク ド 大砲の下方に向く角度。

【照準】 セウジユン ねらひをさだむる。

【黎明】 レイメイ あげがた。

【包圍】 ハウキ つゝみかこむ。

【優勢】 イウセイまさつたせいりよく。

【白旗】 ハクキ かうさんのしるしのはた。

【四隻を擧げて】 セキ ア 四隻共みんな。

【降意】 ガウイ かうさんをするといふこと。

【極力】 キョクリヨク ちからいつぱい。

【追及】 ツキキフ おひつく。

【幕僚】 バクレウ 將軍の參謀事務サンボウジムにあづかる將校。

【移乗】 イジヨウ のりかへる。

【戦果を收む】 せんぐわ たくかひのけつくむ

をとりおさめる。

【汲汲】 キフキフ あせること。(あせり つとむる。)

【殘獲】 ザンククワ のこりのえもの。

【特務艦】 トクムカン 特別の任務に
たがふ艦。

【役務】 エキム やくめ。

【支障】 シシャウ さしつかへ。

【將卒】 シヤウソツ 將校士卒。

【祖國】 ソコク 父祖の國の意。

【奮闘】 フンタウ ふるつてたうかふ。

【勝を制し】 カチゼイ 勝ちを制する。

一四 生存競争

【餘地】 ヨチ ゆとり。

【犠牲に供す】 ギセイキヤウ いけにえにそなへる。

【覺悟】 カクゴ ころがまへ。

【生存】 セイソン いきながらへる。

【到底】 タウテイ とても。

【難行苦行】 ナンギヤウクギヤウ きはめ
てしつらきしゆげふをすること。

【惡魔】 アクマ 人の心をみだし、善行
のよきまがげをするおそろるべき神。

【思案】 シアン かんがへる。

【奇績を收む】 キセキ オホム 自然にてはあり得べ
からざるふしぎのいさをし。

【御稜威】 ミキツゴルクワウ。

【人為】 シンキ ヒとのなすわざ。

【歷代神靈】 レキダイシンレイ 代々の天
子のたうとき神のみたま。

【加護に依る】 カゴヨ 力をそへて守りたま
ふによる。

【麾下】 キカ 將軍の旗の下にをる兵。
(部下。)

【成果】 セイクラ できあがり。

【慈悲】 シヒ なさけ。

【忍辱】 ニンニク はぢをしのび、うら
みをむくいさること。

【旨とする】 シメイとする。

【教訓】 ケフクン をしへてさとすこと
ば。

【なかなか】 どうしてどうして。

【根氣よく】 ヒさしくたへしのぶ力
がよい。しんばうぶよく。

【長閑】 ノドカ ゆつたりとしてうらら
かなる日。

【散歩】 サンパ あちらこちらを、そぞ

ろあるきずすること。

【皮相】 ヒリウウはへ。

【無事平穩】 アツヘイマン ことなくおだやか。

【結果】 ケツクワ ことのみつまり。

【風前の燈】 フウゼン トキシビ 風はなのともし火の如く、あやうきことの上なきこと。

【油断】 ユタン 心をゆるしてちういを怠ること。

【自然界】 シセンカイ 吾人以外に存する天地萬物のはんる。

【繁殖】 ハンシヨク ふえること。

【假定】 カテイ かりにさだめる。

【總量】 ソウリヤウ ぜんたいの分量。

【制限】 セイゲン だまりたるかぎり。

【飽食】 ハウシヨク あくまでくふ。

【生存競争】 セイソンキヤウサウ 生物の

生存するために、まされたるものゝ生存し、劣りたるものゝ死滅するありさま。

一五 奮闘

【奮闘セザレバ勝利ナシ】 「つとめは

げみて、如何なる困難にもうちかち、如何なる危険にもたへる心があるのでなければ、人に打ちかつて、おのれをすゝめることはできぬ。」といふことなり。

【境遇カワレ境遇ヲ作ル】 人のまはりあはせには、幸なるあり不幸なるあり。得意なるあり失意なるあり、されどその運命は、自然に來るにあらずして、自分の行爲がこれをづくりいだすのである。されば勤勉すれば成功に意なくとも、

おのづから幸運これにともなひ來りて幸福を得べしといふことなり
【生命ノ存スル間ハソコニ望アリ】 人は息絶ゆれば何事もそれまでなれども、かりにも生命さへ存すれば、失敗に失敗をかさね、幾度つまづきたふるゝとも、失望して力をおとすことなく、勇をあげまして猛進すれば、終には運命の光はあらはれて、幸福を得べしといふことなり。

【河深ケレバ流静ナリ】 「河の流が深

ければ、おのづから水の流もしづかなる如く、人も學識が深ければ、おのづと沉着チンチャクにしてかろがろしき風なく、重厚ジウコウにして、人々より敬ひたつとばるゝに至るものだ。」といふ意なり。

【吠ユル犬ハ眠レル獅子ヨリモ遙ニ有用ナルコトアリ】獅子は百獸の王ともいはるゝほどの勇猛なる獸にして、人々のおそるゝところなれども、眠りて動かざれば用をなさず。犬は獅子の如き猛獸にはあ

らざれども、よく吠ゆれば人を警醒セイセイして用をなすべし。人も如何に天才ありとも、怠りて勤めざればその用をなさず、活動すると、惰眠をむさぼるとに於て、そのできばえに顛倒するところあるをさせらるなり。

【數多ノ事件ヲナスベキ捷徑セツテイハ云々】數多き事を一時になさんとせば、勢力多方にわかれて一つも成功する所なし。されば數多の事件を成し遂げんと欲せば、一事に勢力を

あつめてこれをなしとげ、然るのちに又更に他の一事に移るといふやうにすべし。これがかへつて數事件の効果をあぐべきちかみちなりとの意なり。

【怠惰ハ猶錆ゴトシ云々】怠惰と云ふものは、たとへて見るとさびのやうなものである。使用せずしておけばさびによりて物の用にたたなくなる如く、人もおこたりて業をつとめざれば、ますます墮落ダラクの淵にしづみて、社會より見すてら

るれども、つとめて勵めば、器のますます光を放つが如く、才智の光輝をはなちて、世人にもてはやさるゝに至るものだ。」といふ意なり。

一六 伊能忠敬の晩學

【養嗣子】ヤウシシ 他より養はれてあつとぎとなりしもの。

【平平凡凡】ヘイヘイボンボン 世のつねなみにて、すぐれたるところなきもの、稱。

【一意専心】イチイセンシン心を一つにして、他をかへりみざることを。

【任務】ニムムおのれのつくすべきやく目。

【圓滿】エンマン缺くる所なく十分に。

【麗しく果さん】立派になしおほせんとすること。

【一擧手一投足の勞】一たび手をあげ、一たび足を出すといふほどの、少しの骨折と云ふ義。

【甘んじて】心に満足して不平なきこと。

「情を屈し」動いてくる心をおしこめて人に従ふ。

【氣を抑へ】いきほひづいてくる心をおさへつけてこらへる。

【才氣】サイキ才智のはたらき。

【徳量】トクリヤウ 徳のすぐれて居ること。(人物の大いなるをいふ。)

【奇才】キサイ衆人にことなりてめづらしき才。

【成功を見ず】できあかりを見ない。

【算數】サンスウ 數學のこと。

【曆術】レキツユツ 日月のめぐるさま

を考へて測定する法。(こよみに關する法。)

【資を抱く】うまれつきをもつて居る。

【市井の凡人】まちうちの平凡なる人。

【伍し】なかまいりをする。

【唯一の望】一つありて二つなきのぞみ。

【三十餘年一日の如く】三十年あまりの間かはりなきこと。

【ひたすら】いちぢつに。(専心。)

【丹誠】タンセイ 心いつばい力をつくして事をなすこと。

【義務】ギム なしはたすべきつとめ。

【閑散】カンサン いさま。(ひまでをること。)

【老境】ラウキヤウ 老人のさかひ。

【前途多望】セントタツツ ゆくべきことのぞみが多い。

【爲すある人】事をなすに足るの才ある人。

【世の務を辭し】世の中の人に對するつとめをしない。(せけんづきあ

ひをせぬ。

【花月の遊】花や月をながむる遊。
(風流のおそび。)

一七 伊能忠敬の晩學

その二

【寓】グウ かりのすまる。

【尋常一様】シンジヤウイチヤウ 世の常

ひごとほり。

【笈を負ひ】學問修業のために出て
ゆくの事。

【郷關】キヤウクワン うまれたむらの

境にある門。(郷里。)

【都門】トモンみやこといふ意。

【信仰】シンカウこころのそこより信
ずること。

【曆象】レキシヤウ 日月運行のありさ
ま。(天文。)

【曆法】レキハフ こよみに關する法。

【師弟の契】師弟の約束。

【流石に】世間に名をあらはすほど
の人だけあつて。

【門下生】モンカセイ 門人とか弟子と
か云ふ意。

【同門】ドウモン おなじ様に門人とな

つて居るもの。

【笑柄】セフヘイ わらひぐさ。(ものわ
らひのたね。)

【晩學】バンガク 年をとつてからの學

問。

【嘲笑】テフセフ あざけりわらふ。

【非凡の士】つねの人にこえてすぐ
れたるをさう。

【空しく志を抱いて墓穴に入る】な
んのなすこともなく、たゞ志をも
つたまゝで死んでしまう。

境にある門。(郷里。)

【都門】トモンみやこといふ意。

【信仰】シンカウこころのそこより信
ずること。

【曆象】レキシヤウ 日月運行のありさ
ま。(天文。)

【曆法】レキハフ こよみに關する法。

【師弟の契】師弟の約束。

【流石に】世間に名をあらはすほど
の人だけあつて。

【門下生】モンカセイ 門人とか弟子と
か云ふ意。

【志の淺からざる】志のふかきこと。

【不可あらん】よくないことがあ
らうか。

【區々】ク、小なるこま／＼したる
こと。

【群小】グンセウ 多くの徳量なき人。

【蛙鳴蟬噪】アメイセンサウ かはづが
鳴く如く、蟬がさわぐ如くに、多

くの小人がくちやかましくいひは
やすこと。

【比較】ヒカクくらべる。

【堤防の決潰して洪水の寄するが如

【く】つゝみどてがきれて、大水のおしよせてくるがやうに、勢の盛なることにいふ。

【蘊奥を極め】意義のおくふかきところまでおしきはめる。

【肩を比す】かたをならへて立つこと。

【測量】ソクリヤウ 土地の高低廣狹等をはかること。

【修得】シウトク おさめて自分のものとする。

【運用する機】はたらかしてやくに

たてるばあひ。

【暮齡】ボレイとしのよりたること。

【氣力旺盛】キリヨクワウセイ きぶんた

いりよく共にさかんなること。

【さながら】あだかも。(全然、宛然。)

【喜色満面に溢れ】よろこびのやうすが、かほちうにいっぱいに見える。

【即日】ソクジツ その日すぐ。

【勇往直前】ユウワウチヨクゼン いさましくまっすぐに勢よくすすんでゆくこと。

【辟易】ヘキエキあとしざりするところ。

【元氣勃勃】ゲンキボツボツ 精神の活動する力がさかんにおこりたつこと

【胸裏】キョウリ むねのうち。

【早熟早老】サウジュクサウラウ はやく老人となりて、はやくことをさる。

一八時

【巧妙を極め】コウマウ ふしぎなほどたくみなることがこの上ない。

【比類】ヒルキくらへる。

【大功を奏す】ダイコウをソウす 大いなるいさをしを

あらはす。

【嗤つて】ワラつて 笑ふにおなじ。

【價値】ケツチ ねうち。

【一敗地に塗れた】イツパイチニヌレタ ひどたびやふれて、ごろの中におちこんでしまつて、たつことの出来なくなることを。

【部將】ブシヤウ 部下の大將。

【遅參】チサン おくれてくる。

【成功の秘訣】セイコウのヒケツ ものをしあげるおくのて。

【興味が湧く】おもしろみがあとかからあそへとでて来る。

【進捗】シンセフ はかざる。(捗は涉の誤ならんか、捗なれば音「ほ」おさむ)と訓す。意熟せざるが如し。

【索然】サクセン 物のつきて味のなきさまにいふ語。

【季節】キセツ 時節。

【失敗者】シツバイシヤ しくじつた人。

【明日ありこの歌】今日みなくとも、まだ明日あることだから、あす見にゆけばよろしいといつて居る内

なすべきやくめ。

【辯疏】ベンソ いひひらきをする。

【辯解】ベンカイ いひわけをすること。

【御者】ギョシヤ 馬をつかふもの。

【余が余たる所以】自分の自分として世にたつて居るわけ。

【晚餐】バンサン 夕飯におなじ。

【食卓】シヨクタク 食事をなすだい。

【義務を重んず】自分の分限職分によりてなすべく、又なすべからざる務を重くおもふ。

に、それもそらだのめとなつてしまふことがある、なせなれば夜半にあらしの風がないものと限つたわけではないからである。

【茫然】パウセン ぼんやりすること。

【自失】ジシツ きぬけのすること。

【時機】ジキ 時の来るはづみ。

【分陰を惜み】少しばかりの時間を惜しくおもふこと。

【機會を捉へた】をりよくでくはずはづみをつかまへる。

【責任】セキニン おのれのひきうけて

一九 南極探検

【南極圏内】ナンキョクケンナイ 地球の

南極より二十三度半の地を通過して、地軸に直角をなせる小圏の内。

【霽】ミツレ 雪の降下する際、暖氣にあひて其一部のとけてふるもの。

【極地】キョクチ 地球の南北のはて。

【映光】エイクラウ ひかりがうつる。

【天色】テンシヨク そらもやう。

【黑暗暗】コクアンアン まつくろ。

【大幕に鎖され】おほひなるまくに

しめきられる。

【**險悪なる天候**】ケンアク テンカウ 海上のあらくあしき天氣。

【**遭逢**】 ソウホウ であふ。

【**かきむしる**】 かきむしる。てきる。

【**奈落**】 ナラク ちごくのそこ。

【**水平線**】 スキハイセン 静に動かない水のうはべに平行せる線。

【**封鎖**】 フウサ ごとちこめる。

【**翻弄**】 ホンラウ おもちやにせらる。

【**突進**】 トツシン つつこんでゆく。

【**堅牢**】 ケンラウ かたくじやうぶなる

こと。

【**無数の氷塊**】ムスウ ヒョウクワイ かずしれぬ氷のかたまり。

【**芥を掃く**】カイ ハク ごみをはく。

【**徐徐**】ジョジョ しづしづ。

【**躊躇**】チュウチュ ためらふ。

【**意を決す**】イ ケツス れうけんをきめる。

【**囹圄**】レイゴ ひとや。(らうや。)

【**禁錮**】キンゴ ごとちこめて外出のならぬこと。

【**翱翔**】クワウシヤウ そらをかける。

【**滑稽**】コツケイ おどけ。

【**暗憺**】アンタン うすぐらくして、しづかなること。

【**極光**】キョククワウ 極地にて空中に

コウヤク 孤状をなしてみゆる美しき光。

【**沮喪**】ソサウ はっみうしなふ。(元氣

のくじけてうすらぐこと。)

【**孤影蕭然**】コエイシヨウセン 他に伴ふ

ものもなく、唯ひとりものさびし

くする。

【**前途の運命**】ゼント ウンメイ ゆくさきの身にまは

りあはせて来る運。

【**絶望**】ゼツバウ のぞみのたゆること

【**風姿**】 フウシ すがたありさま。
【**イテ**】 テキチヨク 少しづゝ歩むこと。
【**地軸**】 チヤク 地球の中心を南北に貫きたりと、かりに定めたる軸。

二〇 南極五検その二

【**依然**】 イセン もとのまゝ。

【**一角**】 イツカク 一部分。

【**覺束なき**】オホツカ たしかならぬこと。

【**點綴**】 テンテツ ところどころにちら

ほらとあること。

【**海豹**】 カイハウ あざらし。

【雀躍】チャクチャク こおごりをしてよろこぶこと。

一一 端艇につきて

友人に贈る

【近状】キンジャウ ちかごろのありさま。

【水練術】スイレンジュツ 水およぎのじゆつ。

【湘南】シヤウナン 相模の南部地方を云ふ。

【荒磯波】アラソナミ あらいそにうち

よするなみ。

【さこそ】しかあるべきこと。(ともあらう。)

【せめては】やむことを得ずば。(他の事は出来ずとも。)

【催し集め】モヨホアツ うながしあつめる。

【潛習】サウシフ こぎならふ。

【一かど】一人前といふ意。

【レース場】レースバウ 競争をするばしよ。

【人目を驚しくれん】人の目をおどろかしてやらう。

【野心】ヤシン たくらみ。

【洲邊】シツヘン 河中に砂のあつまりてたかくなりたるあたり。

【權をどむむ】カキ 舟をどむむること(權は舟をすゝむる具。)

【遊行】イウカウ あそびまはること。

【いつか】いつともなく。

【忘れ果て】ワスレ わすれてしまふ。

【不思議】フシギ おもひはからずも。

【なかなか】かへつて。(却て。)

【おどづれ】たづねる。(訪問。)

【心づかれしよ】氣がついたね。

【趣意は他ならず】シユイ 意見のおもむき。

はほかではない。

【三叉の江】サンサ 荒川の、千住よりをれて鐘が淵に至るところにて、墨陀川

となるところ、形三つまたになり、こゝをさすなり。

【房總】バウソウ あは、かつさ。

【さては】しかして。(又の意。)

【晴嵐】セイラン 晴れたる天氣に山に起る一種の氣。

【浩濤漫波】カウタウマンバ おほひなるなみひろきみづ。

【積日苦學】セキジツクガク ながき間、

身をくるしめてまなぶ。

【胸を洗ふ】胸をさへぎへごさせる。
【趣を味ふ】やうすをおもひかんがへてみる。

【體育】ダイイク 身體の教育。

【心神】シンシン ころろ。

【好箇】カウコ よらごいふ意にて、箇はたゞそいたるまでの語なり。

【年を逐うて】年一年に。

【レースコース以外】競争の航路の外。

【過半】クラハン はんぶんすぎ。

【同志】ドウシ 志を同じうする人。

【改良を圖る】カイリヤウ 悪しき風をあらためることをもくろむ。

【諭言】サトシゴト いひさかせることば。

【贊成】サンセイ 同意すること。

【匆匆】ソウソウ いそぐといふ意。

二二 農業の快樂

【健全】ケンセン すこやかにすること。
(かたよりたるところなくすこやかならしむること。)

【著實】チャクジツ おちついて忠實なること。

【性急】セイキフ うまれつきがせつかちな。

【奇法】キハフ 人力のおよばぬふしぎの法。

【人事を盡して天命を待つ】人のすべきだけの力をつくして、その上は自然のまはりあはせをまつて居るといふこと。

【妙理】メウリ ふしぎの道理。

【了解】レウカイ さとる。

【科學的精神】クラガクテキセイシン 世界の現象を、實驗上の概括により

て、すぢをたてて研究する學問。

【天然と接す】テンネン セツ 天然に近よる。

【活動の妙機】クワツドウ メウキ いきいきしてはたらくふしぎのきざし。

【仔細】シサイ こまかに。

【觀察】クワンサツ 注意してみる。

【因果の理法】インズエ 原因と結果との正しきすぢみち。

【整然】セイゼン きちんととらなうて居ること。

【會得】 エトクささる。

【美趣】 ビシユ美に對する趣味。

【詩情】 シシヤウ 詩の興味。

【詩材】 シサイ 詩の材料。

【千古の大詩人】 盡未來の後まで、名をのこした大なる詩人。

【詩趣】 シシユ 詩の趣味。

【幽草野花】 イウサウヤクワ 谷ふかくある草や、野にある花。

【討ね】 それよりそれとさぐりもとむること。

【名譽を荷ひ】 ほまれをうける。

【古今】 むかしもいまも。

【例に乏しからず】 ためしがすくなくない。

【本業】 ホンゲフ 本體の職業。

【餘業】 ヨゲフ 本業の外の業。

【掌大】 シヤウダイ 手のひらほどのおほひさ。

【培養】 バイヤウ 土をかけてやしなふ

【あまりあり】 十分である。

【別墅を有するものにおいてをや】 別莊をもつて居るものは、なほさらやすることじや。

【一時の快を貪る】 いつとまのゆくわいをほしがる。

【銃獵】 シウレウ 銃にて鳥獸をかること。

【霄壤の差】 そらと地ほどの差といふことにて、大なる差にいふ語なり。

二二三 レツシングの 比喩譚

【鷺】 ガ 形雁に似て全身白毛なり。あひるにおなじ。

【純白】 シュンミツク まつしろ。

【美を競ふ】 うつくしさをあそぶ。

【窈に思へらく】 心の内でおもふやう。

【前生】 ぜんシヤウ まへの世。

【恐らくは】 たぶん。(おほかた。)

【鶴】 カウ くゞひ。

【同類】 トウルキ なかま。

【屑しとせず】 心よしとしなひ。

【群を離れ】 多くのなかまの居るところをはなれる。

【強ひて】 おして。

【鷹揚】 オウヤウ 小ざきことにあくせ
くせずして、せまらざるさま。(ゆ
つたり。)

【態度を装ひ】 ナリふりをとへのへ
てみせかける。

【優然】 イウセン ゆつたりとしたるさ
ま。

【逍遙】 セウエウ あちらこちらとある
さまはる。

【外觀】 グライクワン うはべのみえ。
(外見。)

【満身の力を籠め】 からだ中の力を
。

いれる。

【あだなりき】 無益のことであつた。

【武骨】 アコシ かなやかならざるこ

【力及ばず】 力がたらない。

【苦心の結果】 心をくるしめたつ
まりのできあがり。(くしんのは
て。)

【畸形】 キケイ かたわ。

【無遠慮】 ブエンリヨ えんりよなきこ
と。

【英邁】 エイマイ ひいですぐれたるこ
と。

【伍す】 仲間に入つて雑居すること。
【余に投ず】 自分のところに身をな
げられる。

【任侠】 ニンケフ よむきをたすけ強さ
をひしぐ。(をいじぎ。)

【おも】 さまの意。(實に。)

【得意氣】 トクイゲ じまんらしく。

【さばかり】 それほど。

【御せらる】 つかひまはさる。

【至大の恥辱】 きはめておほひなる
はら。

【事もなげに】 じぎょうをなげに。

【名譽をか博し得ん】 ほまれをとる
ことができやうか。

二四 殊勝なる武者振

【封ぜられ】 封は土地をかぎつて大
名に領せしむること。

【阿閉掃部】 アベカモンと訓む。

【武功のほまれ】 武術のいさをしあ
る名譽。

【厚祿】 コウロク てあつきふち。

【召し抱ふ】 よびよせて家來とする
うか。

【狛伊勢】 コマイセと訓む。

【國にて】 越前をさす。

【世祿】 セイロク 代々の扶持取。

【歴歴】 レキレキ 世にかくれなき家柄。

門閥といふ義。

【嫡子】 チヤクシ 家の相續人。(あとと

り。)

【鎧の著初】 武家にて、男子十四五歳

になれば、初めてよろひをつけし

めて祝せしなり。此日武功ある人

を招きて、よろひおやとし、子の

出世をあやからしめしといふ。

【招待】 セウタイ まねきもてなす。

【饗膳】 キヤウセン ちやうの膳部。

【愚息】 グソク 子息の義。(せがれ。)

【いや】 否といふ意。

【黙し難く】 だまつても居られない。

【武者振】 ムシヤフリ 武士のよろひを

つけたる姿。

【見事】 ミコトリーつばなること。

【江州】 コウシウ 近江の國。

【わたり】 近邊。

【引き候ひし】 ひきあげてをつた。

【敵とおぼしく】 敵とおもはる。

【かせぎ】 事につとめ、いそしむこと。

【人體】 ニンテイ ひとがら。

【御不足ながら】 「ごまんどくではな

からうが。」の意。

【こなた】 此方。(手前の方。)

【馬を乗り放ち】 馬よりおりて徒立

となること。

【槍を合す】 槍と槍とをあはせて突

か合ふこと。

【雑兵】 サウハウ いやしき歩卒の稱。

【突き崩す】 歩卒の隊をつぶやぶる。

【暮れ果て】 くれてしまふ。

【物のあやめ】 ものゝすぢ目。(文理)

【名残惜し】 わかれて後に心の残る

こと。

【暇申し候ふべし】 おわかれ申しま

せうの意。

【陣頭】 チントウ いくさのまつるもの。

【身方】 ミカタ 自分の方の人。

【わりなく】 割なくの意にて「めつた

むしやうに。」といふ意。

【入魂】 シュツコン こんいにすること。

【さらば】 さやうならばの意。

【浪士】ラウシ 主人をもたぬ士。(仕官せぬ人。)

【勝手】カッチ「だいごころ」の方をさしていふ語。

【蹂り出で】ひざすりながらでる。

【今更】イマサラ 今となつて。

【はづかしながら】「はづかしくはあるがの意。

【浮きたる事】取りとめもなき、たしかならぬこと。

【おぼすべく】お思ひなされるであらう。

二五 流泉啄木

【ゆくも歸るも云々】「ゆくものもかへるものも、こゝにてわかれ、知る人も知らないものも、共にゆき逢ふといふ、逢坂の關所の杉林を吹く風はあらくして」の意。

【わら屋の軒に云々】わらにてふきたる關所の番小屋の軒にさす月の影さへ、さしたりさゝなかつたりする、空もやうのはつきりしない秋の夜であるよまあ。

【雙方】サウハウ 二人共ごちらも。

【鎧の緘】よろひの小札を糸又は革にてつゞりたるをいふ。

【久しくて逢ふ】久しぶりに逢ふ。

【本望】ホンマウ もとくよりののみ。

【脇差】ワキザシ 大小の短きかたをいふ。

【引きけり】「引出物とした」この意。(引出物とは、饗應のとき、主人より客へのおくりもの稱。)

【あはれにたへで云々】かゝる悲哀のさまにたへかねて、蟬丸は自分のだいにして、身をはなさぬ一面の琵琶をとり出し、氣をはらさんどてかきならすなれども。

【みやこ戀しく云々】すみなれし京都の地がなつかしく、友なつかしどの思は、思はず知らずたれにいふともなく言葉に出て。

【心あらん人云々】心のあらう人の來よかし。

【應こたへて云々】應は返答する

詞なり。さて意義は、おうと返事を
 をして、柴にてつくれる門の内に、
 衣と袖もつゆのためにしめつぽく
 なつて、われこそは都にある博雅
 ぞと、自分の名をなりのりながら入
 り來れるば、世にも大そうすぐれ
 たりとの名ある音楽者であつた。
 【流泉啄木云々】流泉啄木は琵琶の
 曲の名なり。さて意義は、かねて
 ひみつにして人々に傳授しない、
 流泉の曲や啄木の曲をば、こよひ
 こそはひき出しはせぬかと、三年

の間毎夜毎夜、この逢阪山にか
 よつて來ましたと云ひ出す詞を聞
 いて、心なき石でさへも首肯して
 きゝいるべき程の熱心なる心ばえ
 に感じて、流泉啄木の二つの祕曲
 をみんな傳授をした。
 【撥もてまねく云々】昔源氏物語中
 にある、うばそくの宮の御女は、
 月明なる秋の夜に、西山におちん
 とする月を惜みて、撥にてまねぎ
 たまへりと云ふ故事のある、入り
 かゝれる月の世界にありてふ桂の

樹を吹く秋風と、岩の間にゆきと
 いまつて音をたてゝ居る水とは今
 も昔にかはらず音をかよはせて蟬
 丸の昔をしのんで居ることであら
 う。

二六 佐久間大尉

【慷慨】カウガイ 心がふるひたつて、
 なげさかなしむこと。
 【節に死す】やくめを守りて、職分の
 ために死す。
 【従容】シヨウヨウ ユつたりとおちつ

いて。

【死に就く】命をすてる。
 【不慮の禍】おもひもよらぬ災難。
 【狼狽】ラウバイ うろたへる。
 【應急】オウキョウ きふの間にあはする
 こと。
 【職に殉せし】やくめの爲に、命をな
 げだして死ぬ。
 【最後】サイゴしにぎは。
 【冲合】オキアヒ おきの方。
 【演習】エンシブ 實戰的のけいこをな
 すこと。

事。

【鎮守府】 チンシユフ 出師準備、防禦
計畫をなすために、軍港におかれ
たる役所。

【即刻】 ソクコク 直に。

【派出】 ハシユツ 手わけして出張させ
る。

【遭難地】 サウナンチ さいなんにあつ
た地。

【急行】 キフカウ いそぎゆく。

【地點】 チテン ばしょ。

【著手】 チヤクシユ とりかゝる。

【従事】 シウツ とりかゝる。

【故障をや生じけん】 故障ができた
とみえる。

【行方】 ユクヘゆくべき方。

【母艦】 ホカン 艇に従ひ行きて、薪水
其他いろいろの給養をなす艦。

【僚艦】 レウカン 行動を共にせる艦。

【百方搜索】 ヒヤクバウサウサク いろい
ろてだてをつくしてさがしもとむ

【無線電信】 ムセンデンシン 電線を用る
ずして通信する電信。

【急】 キフ ゆうよすべからざる一大

【辛うじて】 やつこのことで。

【作業】 サゲフ しごと。

【排水】 ハイスイ 内部にはいつてをる
水をそとへ出す。

【換氣】 クワンキ 空気をいれかへる。

【経過】 ケイクワ 時間がたつ。

【腕を拱き】 うでぐみをなす。

【端坐】 タンザ たゞしくすわる。

【部下】 フカ 自分の下についてをる
もの。

【仰臥】 ゲフグワ あふむきにねる。

【安坐】 アンザ あぐらをかいてをるこ

と。

【勇敢】 ユウカン たけしくおしきつて
する。

【死を遂げ】 いのちをすてゝしまふ。

【運命を共にす】 おなじまはりあせ
の下に身をおく。

【光景】 クワウケイ ありさま。

【悲壯】 ヒサク なげきかなしみて心が
ふるひたつこと。

【臨終の際】 いまはのときにのぞん
で。

【言言句句】 ゲンゲンクク 一言一句。

【至誠】 シセイきはめてたしかなるまごころ。

【経過】 ケイクラ 事のとほりすとして来た次第順序。

【巨細】 コサイ 大小となくこまかに。【職を守り】 やく目を大切にしてくす。

【沉着】 チンチャク おちついて。

【事を處せり】 ことをとりはからふ。(とりさばく。)

【職に懸る】 やく目の爲につくして死ぬ。

【遺憾】 キカンのこりをしきこと。(残念。)

【誤解】 コカイとりちがへをする。(おもひちがへ。)

【將來】 シヤウライ のちのち。

【發展】 ハツテン のびひろがる。(さかんなになりゆくこと。)

【打撃を與ふ】 力をくじけさせる。

【希はくは】 どうぞ出來うることならばの意。

【全力を盡す】 あらんかぎりの力をつくす。

【忠實】 チユウジツ 正直にしてま心をこめてつとめる。

【一身の安危】 自分一人のあやふきつ安あやふ。

【偏に】 ひたすらに。(ひとすぢに。)

【至尊】 シソン 天皇陛下をさし奉る語

【遺族】 キョク のこつて居るみうちのもの。

【憐れ給ひ】 なさげをかけられんことをねがふ。

【小官】 セウクワン 「位のひく官」をいふことにて、自らの謙辭なり。

【不注意】 フチユウイ ちゆういがたりない。

【仰ぎ願くは】 上に對して請ひ願ふ時の語。

【窮するもの】 なんぎをするもの。

【念頭に懸る】 こころの上にかゝる。(きにかゝる。)

【最後】 サイゴ いちばんしまひに。

【上長官】 シヤウチャウクワン 將官以上の人々をさす。

【永き別を告げん】 死につかんとしたるときにいふ語。(死にぎはのこと)

あいなつきのへやう。

【非常】ヒシヤウ はなはだし。

【最後なり】身の終りといふこと。

(最終。)

【告別】コクベツいごまごひをつげる。

【刻一刻】コクイツコク ひごとまごひご

やう。

【自若】ツツヤク 心がつねとかはらず

して、態度がおちついてをること。

【遺文】キブンかきのこしておいた文

【悲惨】ヒサン あはれなること。

【壯烈】サウレツ 志氣の大きくして、

七〇

行の忠正なること。

【趣味を持ち】おもしろみをもつ。

【友情に厚く】友だちの間の情がふ

かい。

【讀書に耽り】書物を讀むことに深

く心をそそぐ。

【徒に】えうなきことに。

【幸便ごとに】たよりのついでである

たびに。

【海軍思想】海軍のことを思ふ心。

【普及せしめんことを圖り】一般に

しらせやうこのころぐみをする

【皇恩】クラウオン 天子の恩。

【士規七則】シキシチソク 武士たるもの

心得うべき事七箇條といふ意。

士規七則

凡生爲人。宜知人所以異於禽

獸。蓋人有五倫。而君臣父子爲最

大。故人之所。以爲尊。忠孝爲本。

凡生皇國。宜知吾所以尊於宇

內。蓋皇朝。萬葉一統。邦國士夫。世

襲祿位。人君養民。以續祖業。臣

民忠君。以繼父志。君臣一體。忠孝

一致。唯吾國爲然。

士道莫大於義。義因勇行。勇因

義長。

士行以質實不欺爲要。以巧詐

文過爲恥。光明正人皆由是出。

人不通古今。不師聖賢。則鄙夫

耳。讀書尙友。君子之事也。

成德達材。師恩友益居多焉。故

君子慎交遊。

死而後已四字。言簡而義廣。堅忍果

決。確乎不可拔者。舍是無術

也。

七一

【不測の變】はかりしりがたき事變。

【責を負ふ】自分の任せられたる職務上なすべき義務としてひきうける。

【義勇公に奉ず】一身をなげすて、國家のためにつくす。

【龜鑑】キカンかじみ。(てほん。)

【典型】テンケイのりかた。(てほん。)

二七 わが小園

【控へたり】そばにかまへて居る。

【場末】バスマエまちはづれの田舎にちかまるところ。

【まばら】こみいつてゐないこと。

【ゆたかに】ゆつたりとしたるさま。

【はだかの園】何もうゑこみのなきには。

【やがて】まもなく。

【物めかしたる】物らしくする。(見るべきやうにする。)

【老媪】ラウアラ 老いたる女。

【吟興を鼓舞す】詩などくちすさぶ心をほげましたてる。

【一年軍に従ひ】二十七八年戦役に、シゴクニケンシヤ従軍記者として渡清したるをいふ

【さびまさり】ひびくあはれてゐるまがかはる。

【ひと本ふた本】一本二本の意。

【ねぢくれ】ねぢれまがる。

【萬感】バンカンさまざまの心をうごかすことから。

【そぞろに胸にせまり】何故ともなく、胸につきかけてくる。

【からき命】死ぬほどの目にあつた命。

【三逕就荒】サンケイツクアラニ支那晋の世の陶淵明と云人が「三逕就荒

菊猶存。」と歌つた昔のさまの残つて居るのを思ひ出して、口ずさめるなり。さて本文の意は、園にある三すぢのこみちも。今はあれてしまつて、ひとり菊ばかりがこつてをると云ふこと。

【口ずさむ】心にうかんだまゝにうたふ。

【涙がちなり】「なみだががちである。」と云ふ意。

【ありふれたる花】至るところどこにてもある。

- 【**狭苦し**】セイヤクシ せまくきうくつとなる意。
- 【**獄窓**】ゴクサウ らうやのうち。
- 【**呻吟**】シンギン うめくこと。(うなる)
- 【**芳葩**】ハウパ にほひのよきはな。
- 【**うららかに**】 のごやかにゆつたりとしたるさま。
- 【**端近く**】ハシデカ 家のあがりばな近く。(縁先)
- 【**目を遊ばす**】 目をあそぶやうにして見わたす。
- 【**いきいき**】 勢さかんに活動せんとするさま。

- 【**生氣**】セイキ いざいざしたるいざはひ。
- 【**薄寒**】ウスザム すこしさむい。
- 【**ひやひや**】 ひややかなるさまにいふ語。
- 【**隙を侵す**】スキオカ すきからはいつてくる。
- 【**絲萩**】イトハギ 枝の細きはぎ。
- 【**思ひやられて**】 おしはかる。(想像)
- 【**夕影**】ユフカゲ ゆふ日のかげ。
- 【**酔うたるが如く**】 興味を感じて心をとられたやうに。
- 【**うつとり**】 心を失ひたるさま。

まにいふ語。(恍惚)

二八 ボアソナード 氏を送る詞

- 【**例の如く**】レイノコト いつもの通りに。
- 【**文机に凭りて**】ブンキエニヨヅリテ つくゑにもたれて。
- 【**餘念なく**】ヨネンナク 「他の事をおもはず一心」の意。
- 【**法條**】ハウテウ 法律の條文。
- 【**起草**】キサウ したがきをかきおこす
- 【**顔色衰へ**】オトロ かほいろが元氣がない。
- 【**常ならず**】 覺えければ「常のやうで

- ないと思つたから。
- 【**病やある**】 「病があるか」の意。
- 【**かくこそ**】 「このごほり」といふ意。
- 【**養生**】ヤウシヤウ からだの健康たもつやうにする。
- 【**義務**】ギム なすべきつとめ。
- 【**かつは驚き**】オホツカ ひとつにはびつくりする。
- 【**かつは覺束なく思ひ**】オホツカ ひとつには不安心に思つて。
- 【**祕書官**】ヒシヨクワン 大臣のもとにありて、文書の往復、又は庶務を

つかさどる官。

【轉地療養】 テンチレウヤウ 土地をかへて病氣の保養ホヤウをする。

【約束常事者】 ヤクソクタクタウジシヤ 約束の相手となりたる人。

【心おさなく】 心づかひなし。(心配なしに。)

【轉養】 テンヤウ てんちれうやうに同じ。

【歎息】 タンソク ためいきをつく。

【つかさある人】 役をもつて居る人。

【いそしみ】 つとめはげむ。

【立法事業】 リツポフジダフ 法律を設けさだむるわざ。

【諸般】 シヨハン もろもろ。

【擧らざることをやあるべき】 はかのゆかないことがあらうかい。

【一小件】 イッセウケン 一つの小さなことから。

【史傳中】 シデンチュウ 歴史傳記のうち。

【一段】 イチダン ひとくだり。(ひとしきり。)

【價值】 カチ ねうち。

【公衆】 コウシウ 世間多くの人々を云

ふ。

【功績】 コウセキ てからいさをし。

【演述に譲り】 演述エンジュツに譲り はなしをしてのべるのによづつておく。

【餞の席】 餞ハナムクの席セキ 送別の會をひらきたるباشよ。

【遺憾】 キカン のこりをしきこと。(残念。)

【餞す】 「はなむけす」と訓みてもよし。旅立人タビダテにもものをおくること。

【第二の本國】 第二の生れた國。

【注意】 チユウイ こころづけ。

【勸告】 クワンコウ すゝめとぎつげる。(忠告。)

訂修 中等國語讀本卷之三 終

訂修 中等國語讀本卷四

一 忠君愛國

【留學】 リウガク 他國にありて學問すること。

【天長節】 テンチャウセツ 天皇のおうま
れあそばされたるを祝ふ日。

【祝宴】 シュクエン おいはひの宴會。
エンクワイ

【近世史】 キンセイシ 近世の歴史。

【關係】 クワンケイ かゝりつながらる。
クンシヤウ

【勳章を帯び】 國家に功ありしもの

にたまはりたる記章を胸にさげ
る。

【革命】 カクメイ 國の政治上、又は社
會のくみたての上に於ける大變革
のごと。

【不滿】 フマン 心に満足せざるごと。

(不平。)

【權威】 ケンキ 權力威勢。(權力とは、
他人をしひておしつけ、従はしむ
る力といふ。)

【王室】ヲウシツ 帝王のおいへ。

【顛覆】テンフク ひつくりかへす。

【稜威】ミイツ 天子の御威徳。

【國體】コクタイ 國家のくみたてのありさま。(くにがら。)

【言明】ゲンメイ 言語にあらはしてあきらかにする。

【大化改新】タイクラカイシン 孝徳天皇の時に、制度をあらため新しくしたること。

【明治維新】メイジイシン 明治の始に制度萬端の改りあたらしくなりたること。

【領土領民】レウドレウミン 領分として居る土地、および其の土地に住する人民。

【既得の權】キトクケン 従前の法律によりて、正當に取得すべき權。

【唯々諾々】キキダクダク 意見をのべず、つしんで盲従すること。(はいはい。)

【大命】ダイメイ 君主の御下命。

【萬世一系】マンセイイツケイ 「よろづよまごどもひつすぢにしてかはらぬ。」

【成就】シヤウシュ できあがる。

【雨降つて地固る】アメノケ 雨後の地のかたまるが如く、何事によらすごててのあつた後は、かへつて能く事のをさまるものだといふ意。

【文化】ブンクワ 世の中がひらけすむこと。

【採用】サイヨウ とりもちゐる。

【制度改正】セイドカイセイ ためられたるおきてをあらためる。

【詔敕】セウチョク 天子のみことごのり。

【煥發】クワンハツ あきらかに、天下

【維持】キヤ もちつゞける。

【衝突】シヤウトツ ぶつつかりあつてあらしそふ。

【散散な目に遇ふ】サンサン 甚しい目にあふ。(したゝかな目にあふ。)

【枚擧に暇がない】マイキョ ひとつひとつ、かぞへあげるひまがないほど數が多い。

【出奔】シュツボン にげだす。(ちくてん。)

【愚なことを】オロカ 「なんでもなことを。」

一般に發布せらるること。

いふ意。

【刑塲】ケイシヤウ しおきば。

【斷頭臺上の露と消ゆ】罪人のくび

きりだいの上で露のきゆる如くに
もろくもえてしまふ。

【信せられぬ沙汰】「まこと」はおも
はれないこと。「の意」。

【慘酷】サンコク むごたらしい。

【無道】ムダウ みちならぬわざ。

【天之命革而四時成】易の語、「天地
自然にめぐり来るべき四時があら
たまりかはりて歳をなす。」といふ

意。

【天の命】天より命ぜられたる意。

(しぜんのははりあはせ。)

【百姓】ヒヤクシヤウ 天下のよろづの
民。

【覺悟】カクゴ あきらめさどる。

【貴族】キツク 身分のたふとき家柄。

【權力】ケンリョク 無理からでも人を
おしつけ服従せしむる力。

【興望】ヨバウ 世間一般の人の人望。

【羸ち待たる】カ 相手をまかしてえた。
【素性】スシヤウ 身分の血統。

【王侯將相何有種】「王や大名や大將

や大臣になる人は、別の種族があ
るのではない、何人にも志さへ
あれば、其の地位になり得べし。」
といふ意なり。

【覬覦】キョウ つかひねらふ。

【弓を挽く】皇室に向つててむかひ
をすること。

【天子の位をねらふ】天子の位を、お
しとらんとしうかがふ。

【叛臣傳】ハンシンデン むほんをなし
たる臣の事をかいた傳記。

【敵對】テキタイ てむかひ。

【大義名分】ダイギメイブン 君臣の間に
於ける大いなるすぢみらど、君臣
の間の分限次第。

【寵を失ふ】チヨウ 天子の特別なるおいつ
くしみをうしなふ。

【手向】テムカヒ 敵對(抵抗)。

【我儘を通す】ワガマ、トウ 自分の勝手さまを
なしとす。

【檢非違使】ケビキン いにしへ、違法
犯罪の人をたす爲に設けられた
る官にして、今の警視廳にあたる。

【謀叛】ムホン 天子にそむきて兵を起す。

【佛法王法】王者の法令と佛道と。

【不届な丁簡】みぢならぬかんがへ。

【神託】シンダク かみのおつげ。

【排斥】ハイセキ おしのけしりぞくること。

【廢立】ハイリ 君位をしりぞけたり、たてたりすること。

【慾望】ヨクマウ 心の満足をもとめんとするのぞみ。

【この世をば我が世とぞおもふ望月

の云々の歌】「此の現世界をば自分のものぢやとおもふ、十五夜の月はいつちもかけたといふためしがないからして、月のかけざる限りは、此の日本國は自分の家のものぢや、わがおもふまゝにならないものはない。」といふ意。

【満足】マンゾク 十分なりと思ふ。

二 自國語

【血液】ケツエキ 身體の内部にありて、營養をつかさどるもの。(血汁。)

【肉體上の同胞】肉體上より血液の

かよつてうけた兄弟。

【精神的血液】セイシンテキケツエキ 心と

心とのうへにかよつてをるちじほ。

【散亂】サンラン ちりみだる。

【あやつる】ほごよくあつかふ。

【奮起】フンキ ふるひたつ。

【一朝】イツテフ ひとあさ。

【慶報に接す】よろこぶべきさまのしらせをうける。

【一齊】イツセイ いちごぎ。

【ことほぎ】いはひよろこぶ。

【天堂の福音】天上なる神のましま

す所より來れる幸福を興ふる聲。

【美德】ビトク ほむべきよきおこなひ

【これを描きて】じぶんの國の語をさしおいて。

【諸蕃】シヨバン もろもろのえびす人。

【眼中におかず】みとめずしてももの

ともしない。

【野蠻人】ヤマンジン 智識の度合がひ

くく、未だひらけざる國の意。

【原素】ゲンソ ものをくみたてるもと

なるべきもの。

【復活】 フックワツ 一旦すたれたるものを、再びもとにかへしてはたらかす。

【科語】 クワゴ 科學上のことば。

【科學】 クワガク 特殊なる現象の原理を概括して、系統的に論述證明する學問。

【獨立】 ドクリツ 他に服従し、又は束縛を受けざること。

【肩身狭し】 世の中に對して、はげかる處が多くして、はばがきかない。

【建國】 ケンゴク 國の基礎を立つること。

【救助の礎】 キツヂョイシツエ すくひたすくるごだい。

【國家教育】 國家主義によりて、くみたてられたる教育。

【蓋世の豪傑】 ガイセイガウケツ 一代をおほひつくすほどのゑらもの。

【普通教育】 フツウ 普通學の教育、即ち小學中學の教育のこと。

【基礎】 キソ ごだい。(いしづえ)

三 愚公の山

【家居】 イヘキ 自分のすまる。

【引き具し】 つれゆく。

【耒耜】 ライシすま。

【一簣】 イツキもつこに一ばい。

【寓言】 カウゲン 事實を假設したることをほのめかすことば。

【世を諷し】 それとうちつけにはいはずしてことによせてさす。

【かくはいひつらめ】 かくのやうにいつてしまったのであらう。

四 四明山下の卜居

【春來】 シユンライ 春から以來。

【移居】 イキヨ めばしよをうつす。

【僻地】 ヘキチ 片田舎。

【八朔】 ハツサク 八月の一日。

【茅屋】 バウオク わらにてふきたる家。清潔の佳境】 きよらかにさつぱりした。こころよきはしよ。

【閑居】 カンキヨ 心しづかにすまふこと。

【六十年來是非外云々】 「六十年このかた世間の批評をうけない位地になつて居る、四明山下の一人のひ

まびとである」の意。

【先登によつて放たれ】軍令をおかして先登したために、官をしりぞけらるゝこと。

【直言によつて放たれ】はどかるところなく、かざりなくまつすぐに云つたためにおひだされた。

【風味】フツミおらむさ。

【卜居】ホクキヨ ぼしよをみたてゝをる。

【同氣相求む】氣のあつたもの同志のあつまること。

【存念】ソンオン かんがへ。

【早早】ソウソウ いそぐ意。

【混雑に取りまぎれ】とりこみごゝのためさまぎれて。

【延引】エンニン おくるゝこと。

【不宣】フセン 「十分にのべつくさないところがある。」と云ふ義にして、書簡の末尾にかゝ語。

五 蘇 武

【風颯颯】カセサツサツ 颯々は風聲を云ふなり。

【日をかさねたる旅衣】カビコロキ 幾日もかゝる旅のしたくをして。

【匈奴】キョウド 太古より蒙古地方に住する遊牧民をさしていふ。

【夷一エビス 蠻民の稱。

【胸にうれへの波高し】胸にござきとつ波たかくして、かなしみにたへられない。

【老の寢覺やいかならん】年とりたる母の、目のさめたときの心は、ごんなであるだらう。

【草枕】ソサイソウラ 昔は旅するがまじ、

山野に露宿することありしより、草を結びて枕とする意より、旅といふ語の枕詞となす。

【旅寢の空にむすぶとも】旅の道りに、くさをむすんでねることがあらうとも。

【君命重く身は輕し】「君のおほせは泰山よりもおもく、自分の一身は鴻毛もものかは。」の意。

【覺悟】カクゴ ころかまへ。

【使命】シメイ ししやとしごうけたまはつたいひつけ。

【つぶさに】 くはしくおちもなく。

【面接】 メンセツ 面接すること。

【國書】 コクシヨ 隣國互に好を通ずる

時におくる書をいふ。

【非道】 ヒドウものすちみちを知ら
ない。

【旨意】 シイ 意のあるところ。

【單身】 タンシン ひとりみ。

【をしみつつ】 惜しいものとおもひ
ながら。

【しかあらば】 然かあらば。(さうし
たならば。)

【おもく用ゐん】 てあつくおもい役
につかつてやらう。

【幽閉】 イウハイ おしこむること。

【頃しも】 をりから。

【つんざく】 つきざく。

【いのちを繋ぐ料となす】 いのちを
つなぐ材料とした。

【放免】 ハウメン はなちゆるす。

【あざける】 さげすみいふ。

【無念さ】 くやしき。

【秋も最中の】 最中は「まんなか」の
意にて中秋のころをさす。

【せめてはかくてあることをと】 じ

ぶんの身の自由はかなはずとも、
できることならば、かうしてをる

ことを知らせもしたいとおもうて

【雁に託す】 おもひを帛キヌにかいて、雁
の足にむすびつけてはなした筆蹟

【ゆめの間や】 ゆめのまのやうには
やくもすぎさつてしまつたな。

【老いて屈せぬ忠節】 としを取つて
も、心を屈して従はなかつた、心
の守のかたいまごころ、

【不思議】 フシギ おもひもまうけぬこ

と。

【和議】 ワギ なかなほりの相談。

【いつしか雪をそなりにける】 いつ
のまにか雪のやうにまつしろにな
つてしまつた。

六 冒険心

【常識】 シヤウシキ 普通の人に共通す
る適應の智識を有し、思想感情等、
常人の常おこなふべき道に従ひ、
萬事に行きとどいて居る人。(健全
なる常人に通じたる理解力。)

【冒險心】バウケンシン あやふきをお

かして事をなすこと。

【無謀の狂夫】ムボウキヤウフ かんがへのない心の

くるつたをさ。

【常識に富む】常識が十分にゐる。

【碌々】ロクく やくにたゝない。(人

のあとからついてまはるもの、

稱。)

【凡骨】ボンゴツ平凡なる人物。(凡人)

【調合】テウガウ とりあはせ。

【適當】テキタウ ほごよく道理にあた

つて居る。

【活動】クラツドウ いきいきしてはた

らく。

【用心家】ヨウシンカ ようじんふかき

人。

【思案】シアン かんがへこむ。

【空しく】なんのなすこともなく。

【慎重】シンチヨウ かるがろしきふる

まひをなさず、つつしみふかきこ

と。

【態度】タイド なりふり。(からだのか

まへ。)

【立派】リツパ ほめたゝへて、うやま

ふべきまにいふ語。(みごとに。)

【臆病者】オクビヤウモノ たんりよくな

く、物におぢおそるゝたちの人。

【遁辭】トンジにげごぼ。

【用心家に負ふ】用心家よりうくる

ところ。「さいふ意。(たのみとす

る。)

【新世界】シンセカイ 南北亞米利加を

指す。

【登録】トウロク かきあげる。

【資格】シカクもつて居るねうち。(要

件。)

【血管】ケツクロン 血液の通ふ脈管。

(静脈と動脈とあり。)

【膨脹】パウチヤウ 發展して増大する

こと。

【蕃殖】バンシヨク しげりふえる。

【先導】センダウ さきだつてみちびく。

【夢想する所ならんや】ムサウ 夢にもおも

つてをる所であらうか。

【天資聰明】テンシソウメイ うまれつき

がきゝ取りがはやく、先見の明あ

ること。

【焉んぞ】イツンゾ どうして。

【洞観】 ドウクワン みたとうすこと。

【深く思ひ審に慮り】 さきのさき

までを思ひ、こまかにかんがへる。

【断々乎】 ダンダンコ おもひきつて決

行して、中途でかへざること。

【知慮】 チリヨ ちるおもんばかり。

【處す】 とりさばきををつける。

【閉目】 ハイモク 目を閉ぢて見ることをせぬこと。

【視力の達す】 みる力のおよぶだけ。

【飽くまで正視せよ】 十分に正しく

視よ。

をいふこと。

【低回遲疑】 テイクロイチギ いたりも

ごつたりして、ぐづぐづしてうた

がつて居ること。

【暗中の飛躍】 むかふみず、大膽に

進取すること。

【吟味】 ギンミ どりしらべる。

【輕舉妄動】 ケイキヨマウドウ かるがる

しきふるまひをなし、みだりにか

んがへとせずしてうごく。

【本意】 ホンイ まことのことら。

七 ベスビオ

【熔巖】 ヨウガン 火山より噴出して、

熱の爲に溶解し、後冷ゆるに従ひ

て凝固したる巖石。

【目睫に逼る】 目とまつげとの間と

云ふことにてきはめて手近きこと

ろにいふ語。せまるは近よる意。

【灌木】 クワンボク たけたかからざる

木本科の植物。

【草寮】 サウレウ こや。

【案内かたがた】 みちしるべをする

かたはら。

【賊を防ぐ】 ぞくをよせつけないや

うにする。

【松明】 タイマツ たきまつの音便にて

松の脂の多き部分や、竹葦などを

束ねて火を點じ、暗夜に路をてら

すに用ゐる。

【横ざまに吹き靡けられ】 よこの方

へ吹きつけて、かたむき伏すやう

にせられる。

【細逕】 サイケイ ほそきみち。

【振り翳す】 頭上たかくふりあげる。

【踝を没し】クルアシボツ 足くびの處にありて高

くなりたる骨の處をかくす。(くび

す。)

【膝を没す】ヒザボツ すねのあたりまでかく

る。

【歩毎に】ホゴト 一步一步の意。

【雙脚】サウキヤク 兩方の足。

【今一息】イマイキ 今一つ方をいれるればよし

との意。

【錯落】サクラク まばらにちらばつて

をること。

【圓錐形】エンスキケイ まるぎりのか

たち。

【火坑堤】クラカウテイ 火坑のまはり

に噴出物の高く積りて、隄ツツの如く

なれるものを云ふ。

【火球】クラキウ 火のたま。

【闇夜】アンヤ やみ夜。

【核心】カクシン 中心といふ意。核は

果實の中カラにありて、種子を保護す

る堅き殻。

【不斷の雷聲】フダシ たえずおこる雷の聲。

【相寄りて支持す】シヂ 互にもたれあつ

てさへる。

【巨礫】キヨムツ おほひなる砲。

【二道の火柱】ニダウカチウ ひとすぢのひばしら。

【迷り出づ】メリシ いまほひよくとびいだ

す。

【ルビン】ルビン 紅寶石のことなり。

【神を念し】カミをネン かみをいひる。

【屏息】ハイソク いまづかひもせず。

(おぢおそるゝかたち。)

【塵き】チンキ てまねぎするさま。

【身幹】シンカン からだ。

【ゆるめく】ユルメク ゆらゆらとうごく。

【色褪せたる】イロア いろのさめた。

【隈隈】クマクマ すみすみ。

【蔭翳を形りて】インエイカゲ かげをつくる。

【巖罅】ガンカ いはのわれ目。

【平滑】ヘイクラツ たいらになめらか

なり。

【表層】ヘウソウ うはかほの地層。

【火殻】カク 火熱のある地球外部

の固りたる一部分。

【足蹠】ソクセキ あしのうら。

【斷文】ダンモン ひびわれの筋目。

【熔爐】ヨウロ 金屬をとかす爐。(坩

鍋。)

【般紅】 イソコウ 眞紅の意。(まづか。)

【天半の火柱】 そらにたつ火ばしら。

【徒爲】 トキ むだごと。

【蹠坐】 キヨザ 膝をたてゝすわる。

【風斂り】 風がなくなる。

八 吹米人の氣風

【元氣】 ゲンキ 活動せるいきいきした氣力。

【自重心】 ヅチヨウシン 自分のきぐらゐを保たんとする心。(自らをつゝしみてかるくしくせざる心。)

【品格】 ヒンカク 人となりきぐらゐ。

【憂ふるに足るものあらん】 心配するに、それだけの價のあるものがあるであらう。

【觀念】 クワンネン 心の内に、たしかに印象をこゝむること。(たしかなる意識。)

【彩色】 サイシキ いろざり。

【鼓吹】 コスキ ふきこんで勢をつける

【經營】 ケイエイ ごだいを定めて、物事をさめいとなむこと。

【苦心を極む】 このうへもなく、かん

がへをこらす。

【誇稱】 コシヨウ ぼこつてひやうばんする。

【有数の都市】 ヨウスウ ぬびをりの中に加へるみやこ。

【就中】 ナカンツク どりわけ。

【宏壯】 クワウサウ おほひにしてりつぱなること。

【整備】 セイビ どのひそなはる。

【瞪若】 ダウヂヤク あきれて目をみはる。

【自負心に富む】 自分をたのみとし

て、自分を誇る心がおほい。

【堅實】 ケンジツ かたくたしかなること。

【性格】 セイカク うまれつき人となり。

【自由貿易】 己人の自由にまかせて、政府よりたちいつてせわをしない貿易の政策。

【各國の粹】 國々のすぐれたるもの。

【世界を打つて一九となす】 世界の國々を。うちくだいてひとまごめにする。

【氣風】 キフウ 心だて。(氣性。)

【長所】 チャウシヨ すぐれたるところ。

【信賴】 シンライ しんじてたよる。

【秩序】 チツジヨ ものごとの次第。

【整頓】 セイトン どのへるること。

【格別】 カクベツ とりわけ。

【優良】 イウリヤウ すぐれてい。

【運命の開拓者】 カイタクシヤ うんめいをひらくもの。

【固く信ず】 かたくまぢがひなしとする。

【向上心】 カウジヤウシン 上位に向つて進んでゆく心。

【番頭】 バントウ 商家の雇人の、店の

萬事をあづかるもの。

【坑夫】 カウフ 鑽石をほりだす人夫。

【小成に安んぜず】 わづかの成功を以てまんぞくをしない。

【修養】 シウヤウ 品性をやしなひねる。

【品性】 ヒンセイ 個人のもちまへのたち。

【下劣】 ゲツシ みがさげたるいやしきこと。

【紳士】 シンシ 品性高く、禮義に厚く、道徳たかき上品なる人。

【自營獨立】 シエイドクリツ 自立して事をいとなみ、獨立してくらしをたてる。

【レコード破】 キロククハ 記録をやぶる。

【横盜】 ヲウイッ ぬすむ。

【規模の宏大】 キモク かまへかゝりが大きい。

【新奇を競ふ】 キツ めづらしきをわねがちにする。

【比類】 ヒルキ たぐひ。

【櫓形】 ヤグラガタ やぐらのかたち。

【突飛】 トツヒ 冒険なる、向ふ見ずの

ことを行ふこと。

【特色】 トクシヨク ひとごころなるおもむき。

【進取敢爲】 シンシユカンキ ゆくさきの困難をおしのけてすすみ、おしきつて事をなす。

【鬱勃】 ッツボツさかんにおこりたつ。(胸いつぱいにふさがつておこりたつ。)

【振興】 シンカウ ふるひおこす。

【さること】 もつともなること。

【潜水】 チヨスキ たまりみづ。

【要訣】 エウケツ かんじんなる奥義オウギ

九 ポートサイドより

【先使】 センビン さきにだした書信テガキ

【セイロン】 印度の南端にある島。

【落手】 ラクシユ 手にうけとる。

【船足】 フナアシふねの進行すること。

【恙なく】 なんのこしやうもなく。

【アデン】 「あらびや」の南海岸にある港。

【ポートサイド】 埃及の東北海岸にあり。

【安著】 アンチャク ぶじにつく。

【境界】 キヤウカイ くにざかひ。

【夢寐の間に往來す】 ゆめの間にゆ

まよする。

【指願の間】 ゆびざしみる程のてぢ

かき問。

【氣も浮きたち】 うかれて心もそら

となること。

【不思議や】 おもひもよらずやま。

【限なき怨恨悲愁】 さいげんのない、

うらみとかなしみ。

【胸をのみ傷め】 むねをばかりいた

める。

【衰弊】 スキハイ おとろへつかる。

【亡國の迹を弔ひ】 ほろびたる國の

あとをたづねて、哀悼の意をあら

はす。

【貧弱】 ヒンジャク まづしく國勢のよ

わきいさ。

【成り果て】 なつてしまつた。

【盛者必衰】 シヤウツヤヒツスキ さかん

なるものは、かならずおとろふ。

【文化】 ブンクワ 世のひらけすゝむこ

【世界に誇る】 世界に、とくいになり

て示す。

【形骸】 ケイガイ かたちむくろ。

【尖塔堂閣の美】 埃及は、古來國王の

土功を好みしと、石材の多きとよ

り、方尖碑（オペリスク）金字塔

（ピラミット）等の、大建築を起し

たることありて今も猶存せり。即

ちこの「ピラミット」や「オペリス

ク」などの美を稱せるなり。

【行客の憐を買ふに過ぎざる】 たび

びとのあはれみをうけるまでのこ

ま。

【悽慘】サイサン あはれなること。

【天道の循環】テンダウジュンクワン 天地しぜんの道のま

はりあはせ。

【いかにともすべからざる數】どう

ともすることの出来ない運命。

【感慨に堪へず】カンガイ 物事にかんじて、な

げかはしき思にたまらない。

【運河】ウンガほりわりをしたること

ろ。(スエスの運河のこと。)

【三稜洲】サンレウス 河口の分れたる

三角洲のことなり。

【ほの見ゆ】ほのかにみゆる。

【徘徊】ハイクワイ ころころすること。

【荒寥の景】アウラウケイ あれはてゝさびしいあ

りなま。

【月光をやごす】月光のうつること。

【終霄】シフセフ よごうし。(よもすが

ら。)

【胡弓】コキウ 形三味線に似たる一種

の樂器。

【泣くが如く云々】なくやうにもき

こえ、うらむがやうにもあり。を

はりはなにか人に向つていふこと

ろあるがやうに。

【心なき人】同情心のなきひと。

【征衣を濕し】セイイウツルホ たびごろもをなみた

にてじとぐくにする。

【堪へかね】たまりかねる。(たまら

なくなる。)

【船房】センバウ 船中の部屋。

【輾轉の思】テンテン ねがへりをうつて眠に

つかざること。

【一夜をあかし】ひと夜ねむらずに

どうした。

【偉業】キゲツ 偉大なるわざ。

【筆援るに堪へず】筆をとつてかかう
と思つてもかなしくて筆をとる氣
にならない。

【後便】コウビン あとのたより。

一〇 新聞紙

【社會の耳目】ジモク 世の中の耳目とな
りて、諸方の出來事を知らす。

【聾の如く瞽の如く】ロウ コウ つんぼのごと
くめくらの如く。

【諸藩】シヨハン 諸大名の意。(藩は大
名の領土をいふ語。)

【留守居役】ルスキヤク 大名の在國中。
江戸の藩邸をまもる役。

【柳營御沙汰の廻狀】將軍家よりの御命令書の、宛名なしにそれよりそれへとまはす書狀。

【風聞書】コウブンガキ どりざたをかいたもの。(風説がき。)

【事態】ジタイやうす。

【瓦版】カハラバン かはらにほりつけた版の意。

【非常】ヒシヤウ つねならざる事變。

【濫觴】ランシヤウ はじまり。

【發行】ハツカウ 世の中にひろむること。

【むしろ】ごちらかといへば。(いつそ。)

【雜誌】ザッシさまさまの事をかきあつめたる書物。

【姑く措き】しばらくそのまゝにしていいはない。

【和紙】ワシ 日本紙といふこと。

【片面摺】カタメンズリ かた方ばかりにする。

【見窄らし】ていさいがひきたぬ

こと。(貧相な。)

【引札】ヒキフダ今のちらし廣告なり。(諸方へくばる商賣のちらし。)

【改革】カイカク あらためかへる。

【初別】ハツズリ年の初の刷出のこと。

【配達】ハイタツくばりとける。

【不熟練】フジュクレン なれない。

【笑柄】セフヘイ わらひぐさ。

【輪轉機械】リンテンキカイ 同時に両面の印刷、又は二色以上の印刷をなし得る器械。

【利用】リヨウ おのれの方に益あるや

うにもちあること。

【迂遠】ウエンまはりごほし。

【宿學鴻儒】シユクガクカウジュ 多年その道にしたがへる學者や、大學者。

【岸田吟香】キンダキンカウ 美作の人、和英字書をはじめて編纂せり。

【粟本鋤雲】クリモトサユウン 父は幕府の醫官なり。昌平校に入り、後外國奉行となる。

【成島柳北】ナリシマリウホク 幕臣なり。名は弘藏柳北はその號なり。

【旗幟を樹て】一方にありて武將の

旗をたてて相争ふ如く、互に根據をもちて競争すること。

【社説】 シヤセツ 新聞社の持論。(いひはる議論。)

【憚る】 政府の意向をおそれてゑんりよする。

【無味】 ムミ あぢはひなきこと。(をもしろみなきこと。)

【單調】 タンテフ ひどつてうし。

【福地櫻痴】 フクチアマウチ 名は源一郎 幕臣なり。

【寄書】 キシヨ 他よりおくつて來るか

きもの。

【面目を革め】 やうすがかはる。

【外形上】 うはべばかり。

【内容】 ナイヨウ なかみ。

【他かぬふしなきにあらず】 十分まんぞくに思はないところがないではない。

【公平】 コウハイ ひいきめなく。

【忠實】 チウシツ 正直によくつとめる。

【精細】 セイサイ こまかに。

【責任を盡す】 やくめをしおほせた。

【聊か疑なき能はず】 幾分かうたが

ひがないではない。

【霄壤の差】 そらとつちほどの差。

(その差の大なるにいふ語。)

【如くものなし】 およぶものはない。

【觀來れば】 みると。

【現象】 ゲンシヨウ あらはれたるあり

【包羅】 ハウラ つくみくるむ。

【これを放てば六合に涉り】 これを自由にやりはなしておけば、天地四方にわたりて、のこるひまなくみちひろがる。

【これを巻けば密に藏る】 これをま

きておさむるときは、きびしくすさまじき心の内にかくれこもりてあらはれない。

【材料】 ガイレウ ものをつくるたね。

【蒐集】 シウシフ どりあつめる。

【發兌】 ハツダ 書物などを出版すること。

【通信員】 ツウシンキン 通信をする人。

【一片】 イツペンニ 我が四錢七毛にあたる。

【廉も亦甚しからずや】 やすいこと

も亦はなほだしいではないか。

一一 模範村長歡迎會

【自治體】シチタイ 定りたる土地人民を有する團體が、國家よりまかされたる權能によりて、公共の事務をあつかふ自治の制度の下にはたらく團體。

【自治協會】シチケフクライ 自治の制度を發達せしむるためにおこれる一種の會。

【模範】モハン てほん。

【招待】セウタイ まねきよせる。
【歡迎會】クワンゲイクライ 好意を表してむかふる爲にもよほす會。

【華族會館】クラツククライクワン 東京麹町區南山下町にあり。

【臺灣總督府民政部長官】タイワンツウトクフミンセイブチヤウクワン 總督をたすけて部務をすべ、各局の事務を監監する官。

【兩極端】リヤウキョクタン 兩方のごくはし。

【代表】ダイヘウ 他にかはりて意志性

質等を表示すること。(か)はりあらはす。

【對照の妙】タイセウ それとこれとを、てらしあはせることの妙なること。

【當代知名の士】タウケイ いまの世に名のあらはれたる人々。

【蒔繪の卓】マキエ 漆と金銀粉とにて、もやうをあらはしたるつくゑ。

【花絨緞】ハナシウタン はなもやうのあるしきもの。(は)なもうせん。

【光彩陸離】クワウサイリクリ ひかりがきらめくこと。(きら)きらするさ

【野梅】ヤバイ 野にある梅。

【七寶の花瓶】シツホウ 銅又は陶器の面にはまざまの下繪を施し、其上にくすりをつめてやさ出したる七寶焼の花瓶のこと。

【詩趣】シシユ 詩にいひあらはすおもむき。

【横盜】ヨウウイツ いつばいになつてあふれる。

【撮影】サツエイ しやしんをとる。
【挨拶】アイサツ 會員に對してことは

をのべること。

【紹介】セフカイ ひきあはする。

【劈頭】ヘキトウ まつさきに。

【名告をあげ】自分の名をいひたてる。

【無教育】ムケフイク 教育をうけないもの。

【山家育】ヤマガソダチ やまがに生長したるもの。

【見來れば】目をとめて見れば。

【温然玉の如き】おだやかなること
は玉の如くて、才氣がおもてにあ

らはれない。

【精徳の輝】セキトク ヒカリ とくのつみかさなつた

光。 【藹然たる眼】アイゼン マメコ つややかなる眼。

【平和の原泉】ゲンゼン おだやかにをさまる
みなもと。

【質素】シツソ かざりなきこと。(じみ
なること) 【勞動に鍛ひたる】ラウドウ キタ はたらきたぬり
あげた。

【悠然】イウゼン ゆつたりとおちついで。

【天地人三才】三つのはたらき。

【合體】ガツタイ イツチ 一致すること。(ひと
つになる。)

【徳を積む】すぐれたるよき行をつ
みかさねる。

【靈氣】レイキ 神妙不思議なる氣。

【燦爛】サンラン きらめく。

【有爵】イウシヤク 爵位がある意。(爵
に公侯伯子男の五階級あり。)

【有位】イウカイ 位階がある。

【傾聴】ケイテフ 耳をかたむけてよく。

【感想】カンサウ ものにかんじておこ

りたる思想。

【他所行の語】ヨソユキ 他に出たときのこと

【熱心の潮に彩られ】ウシホ イロド 心が熱して血
じはのためにあかくなる。

【功績】コウセキ てがらいさを。

【企てた】クワダ もくろんだ。

【實際】シツサイ 實地のありさま。

【質朴】シツホク かざりのなきさま。

【助役】ヤヨヤク 村長をたすけて、自
治の事務をあつかふ名譽職。

【風采】フウサイ ふうつき。

【老爺】ラッナ おやぢ。

【青年會】年わかき人々のあつまる會。

【勿論】モチロン いふまでもなく。

【母の會】人の母となるべき人々のあつまる會。

【未婚婦人】ミヨンフツン 人の妻とならざるむすめたちのあつまる會。

【處女】シヨサヨ むすめ。

【頑固】クワンコ かたくなるもの。

（氣質がたよりて、物のだらりのわからぬものを云ふ。）

【第二の御敕語】明治二十七年八月

七日に下したまひし敕語にして、

「臣民に殖産をつとめ富強をはかれよ、義勇兵をつのるが如きはえうなきことぞ。」とさしたまひし敕語をいふ。

【拜讀】ハイドク よみたてまつる。

【心を協せ】心をひとつにする。

【勝鬨をあげる】たゝかひかちてあげるべきのこゑをいふ。

【篝火】カハリビ かゝりにたく火。（燎火ともかく、警固夜業などにたく

意。）

【終局】シウキョク いちばんをばり。

【開墾】カイコン 土地をひらく。

【古君子】コクンシ いにしへの徳たかき人。

【火の舌】もゆるばかりに熱心にのべたつる舌。

【電の氣】人をひきつけるやうな氣。

【論壇】ロンブン 議論をたゝかはすばしよ。

【迷り出づ】とびちりて出る。

【方言】ハウダン 土地なまりの言葉。

【威力】キリョク人をおそれしむる力。

【壓倒】アツタウ おしたふす。

一一 農人形

【宣らせ給ふ】おほせくだされた。

【聖詔】セイセウかしこきみことのみ。申すも畏きことながら】申しあぐもおそれおほきことではあるが。

【勸農の訓】農業をすゝめはげます教訓。

【武門の治】ぶけの政治。

【獎め】しやうれいすること。

【三公園】金澤の兼六園、岡山の後樂園、水戸の偕樂園。

【一帯の郊野】ひとつの城下はづれの野原。

【雙眸の中に收む】二つの眼の中にいれてしまう。

【創設】サツセツ はじめてまうける。

【偕樂】孟子に、「古之人與人偕樂故能樂也。」とあり。人とともにたのしむこと。

【行厨】カウチウ ベんたう。

【歡娛を竭さしめ】よろこびたのし

むことを十分になさしめる。

【瓢を傾け】へうたんをかたむけて酒をのむ。

【清遊を縦にせしむ】いやしからざる風流のあるびを、思ふまゝにせしめる。

【素焼】スヤキウはぐすりをかけない土器。

【結髪】キツハツ かみをむすぶ。

【積糞】ツミソラわらをつみかさねる。

【跪坐】キザ 正しくすわること。(かしまる。)

【雅致】ガチ 風雅のおもむき。

【居常】キヨシヤウ ふだん。

【農事に致し】心を農業の事におよばしめる。(心を農事にくばる。)

【小亭】セウテイ ちいさなるちん。(好文亭をさす。)

【親しく】じぶんて。

【稼穡】カシヨク 禾をうる禾ををさむるといふことにて、農業の意なり。

【勞苦を察し】ほねのをれるさまをみる。

【初穂】ハツホ はじめて出でたる稻穂

の意。

【朝な朝な飯食ふごとに云々の歌】

「まいあさく、めしをくふたびに、ろく／＼なさけをかけていたはりもせぬ、民百姓にめぐまれて、我が身のやしなひを、うけてをるといふことを忘れるなよ。」といふ意なり。

【侍臣】ジシン おそばのけらい。

【慈母】シホ なさけふかき母。

【赤子】セキシチのみご。

【百姓】ヒヤクシヤウ 農民のことなり。

【乳母】ウツ、ちんをくれてそだつる女。

【何の擇ぶどころあらん】何のくべつをつけるところがあらうか、おなじことじや。

【爾來】ツライそれから後。

【蓋し】多分といふ意。

【模造】モザウかたをとつてこしらへる。

【懇なり】てあつたこと。

【菟裘の地】あんきよしよ。

【大日本史】神武天皇より後小松文

皇に至るまでの、史實をかきたるもの。

【監修】カンシウ 監督して編纂すること。

【引見】インケン ひき近づけてあふこと。

【西山莊】セイザンサウ 西山の山莊の

意にて、伯夷叔齊の兄弟が、西山にかくれたる故事にとりて、名づけたるなり。

【心字の池】シンジ 心の字の形にほりたる池。

【十數人を容るゝに過ぎず】十數人をいふより、よけいにははいれない。

【書院】シヨケン まやぐま。

【闕を轍す】しまるをとりはずす。

【前後相承けたりといふへし】まへの光圀卿と、のちの齊昭卿とは、互にうけついたものといつてよからうの意。

一三 人の一生

【人の一生は重荷を負うて遠き道を

ゆくが如し云々】人の一生の間はながきものにて、其の責任の大なることは、重荷をおうて遠路をゆくが如きものなれば、困難苦痛にもたへ忍ばざるべからず、又いそがば早くつかれて、かへつて目的の地に達することも得ざるべければ、成效をいそがず。一步一步堅實にふみしめて、やすみなく倦まず怠らずとめて、最終の目的を達すべしとなり。

【不自由を常とおもへば不足なし云

【身の不自由をつねのこと、おもつてをれば、不自由をなげいてぐちをこぼすが如きことなく、萬事につけて不平もいせず、身の境遇にまんぞくを得べし。心にのぞみがおこつたならば、困きうしたるとき、事をおもひ出して落膽するな。悲觀するな。かくして忍耐すれば、その内に運命再會の喜びを得べしとなり。

【堪忍は無事長久のもとの云々】人は何事をなすにも、たへしのんて

なれば事をなすには、成效をおもんばかりと同時に、いかにせば失敗せざるをうべきかをかんがへおくべしとなり。

【おのれを責めて人を責むるな】なにごとによらず、自分がわるいとおもつて人をわるいとおもふな。自分の身のたらはぬより起りたること、おもひあきらめ、身をつしみて、ますます奮勵努力すべしとなり。

【及ばざるは過ぎたるよりまさるべしなり】

をれば成效を期すべく、人に對しても、恨をかひ仇を求むるが如きことなかるべし。一はのほらだしさに事を處すれば、常軌をはずして成效をやまら、一身の害をも受くるに至るべしとなり。

【勝つことばかりを知りて云々】かつといふことばかりをはかりかんがへて、失敗することのありはせぬかと云ふことを少しも考へおかすば、はからざる災難の生じて、その身をほろぼすやうになるもの

ひかへ目にしてをるのは、やりすぎたるよりはました、やりすぎたものは取りかへしがつかないけれども、ひかへ目にしたるは、務むれば成效の域に達すべしとなり。

一四 植物の景觀と

氣象との關係

(その一)

【景觀】 ケイクロン ながめ。

【氣象】 キシヤウ 晴、曇、風、雨、寒、暖などの現象を云ふ。(天氣もやう。)

【宇宙】 ウチウ 天地間といふ意。

【現出】 ダンシニツ あらほしいだす。

【霞】 カスミ 烟やもやのやうに、うすくかすめるものゝ稱。

【たなびく】 よこにながくひくこと。

【山櫻】 他種の櫻にさきだちて、はやく開花する櫻の一種。

【趣深し】 ふうるんがふかい。(風雅のやうすが深い。)

【調和】 テフマ程よく相合すること。

【おそろく】 おほかた。

【優美艶麗】 イウビエンレイ 上品にやるとる。

しく、つやつやしくてうるはし。

【特性】 とくべつなる本来のもちまへ。

【現す】 あらはす。

【霞に籠められ】 かすみにとちこめらるゝ。

【をち方】 遠方。

【紫雲英】 レンゲ 荳科の一年草にして水田の肥料に用ゐらる。

【蒲公英】 タンポコ、菊科植物、原野至るところに多し。

【一面】 イチメン いつばいにの意。

【おとづれ】 たづねて来る。

【心地よびに】 きよもちよびなること。

【日和】 ヒヨリ そらもやう。

【特徴】 トクテヨク どりわけて立ち目たるしるし。

【萬緑】 マンリヨク あまたの樹木が、鬱蒼として緑色を呈するをいふ。

【快晴】 クワイセイ はれわたりたること。

【何となく】 「何となく」にて、何故ともなくの意なり。

【夕立】 ユウダチ 夏のころ急にふりく

る雨。

【枝さし交し】 枝が互にいりちがつてをること。

【配合】 ハイガフ どりあはせ。

【緑滴らんばかり】 みづみづしき、緑のいろをなせる有様は、水のおつるほかにつゆつばい。

【妙にして】 すぐれてたへなること。

【そぞろに】 何故ともなく。

【見やらるゝ】 おのづから見わたさるゝ。

【槭樹】 カヘテ 楓ともかく、蛙の手の

如き形したる葉あり。

【公孫樹】 イテフ 「ぎんなん」 ともいふ。扇形の葉あり。

【臘梅】 ラツバイ 「からうめ」 ともいふ。黄色の花をひらく。

【いち早く】 まつるまじ。 (逸早くなり。)

【花曇】 ハナグモリ はなさく頃のうすぐもりをいふ。

【燕子花】 カキツバタ 花飛燕の如し。

(杜若ともかく。)

【花苧蒲】 ハナシヤウブ かきつばたに

似て、初夏の頃花ひらく。

【溪蓀】 アヤメかきつばたに似て、葉稍細く花もちいさし。

【幽情】 イウジヤウ おくふかきおもむき。

【形容し得べくもあらず】 ものにかたごりて、云ひあらはしえられやうともおもはれない。

【驟雨】 シウウ にはかあめ。

【梧桐】 エトウ あをざり。

【一しほ】 ひごきは。(一層。)

【鮮緑】 センリョク あざやかなるみどり。

【餘滴】 ヨテキのこりのしづく。

【急雨】 キツウ 驟雨におなじ。(にはかにふつてくる雨。)

【天鵞絨】 ビロウド 舶來の絹織にて、よこに銅線をいれて織り、織りあげて後に銅線をぬき、毛だゝしめたるもの。

【構造】 カウザウ くみたて。

【联想】 レンサウ つれておもふ。

【見るから】 「ちよつとみただけ」の意。

【はかなげなり】 もろくしてあはれげなり。

【蕭條】 セウテウ ものさびし。

【うつむきつゝ】 下をむきながら。

【しめやかなり】 ものしづかなること。

一五 植物の景觀

氣象との關係

(その二)

【常磐木】 トキハギ 四時、葉の落下せずして、緑色をたもつ樹木。

【純白】 ヂュンバク まつしろ。

【南天燭】 ナンテン 常緑の灌木にして、赤き實生ず。

【ほの見え】 かすかにみえる。

【魁偉】 クワイキ すぐれて大いなること。

【しなやか】 しななとして、こはからざるさま。

【豪壯】 ガウサウ すぐれてつよくさかんなり。

【清楚】 セイツキ よくあつさりとしたるさま。

【そよ吹く】 そよそよとしづかに吹く。

【樂を奏す】 おんがくをかなづりだす。

【木枯】 コカラシ 秋の季より初冬にかけて吹く風。

【凄じき】 ものすこし。

【興なからずやは】 おもしろみがないことがあらうかいある。

【芒】 ス、キ 禾木科に属する草なり。

【戦げる趣】 そよ〜とおとをたててをるありさま。

【風物】 フウブツ ながめに入るもの。

【あはれ深し】 情がふかい。

【さしたる】 これといふほどの。

【いひしらぬ】 なんともいひえられぬ。

【あはれのこもる】 情がつままれてをる。

【松籟】 シヤウライ 松風のおと。

【美妙】 ビメウ うるはしくたへなる。

【奏し出で】 かきならしいづる。

【風の見するあはれ】 かせの見せる情。

【詩人の吟咏】 詩歌をつくる人の、詩の上にいひあらはすことば。

【をかしき】 おもしろい。

【空合】 ソラアヒ そらの様子。

【花かど見紛ふ】 花かど見まちがへる。

【雲の峰】 夏の空に雲たちて、峰の如く見ゆるをいふ。

【とりどり】 それぞれ。(各自。)

【幽邃】 イウスイ おくぶかくして、しづかなること。

【罩め】 籠めにおなし。(とちこめる)

【風趣】 フウシユ おもむぎ。

【禾本科】 葉脈のたてにならざる葉を有する單子葉植物。

【款冬】 ツハヅキ これを「山吹」とよむは非なり。

【その観】 そのながめ。

【朧月】 オホロツキ ほのかにすめる月。

【夜櫻を配し】 よざくらをとりあはせる。

【朝日に匂ふ】 ^{ニホ}あさ日にいせいよくうつる。(ぱつぱつうつる。)

【壯快】 サウクワイ おもむぎ。

【比すべくもあらず】 くらげやうにも、くらげもものがない。

【快活】 クワイクラツ きもちよくいさましきこと。

【いひがたき】 云ふにいはれない。

【涼氣】 リヤウキ すずしいなるさま。

【中秋の月】 八月十五日の月。

【空にさえ】 そらにすみわたる。

【暗香の浮動】 ^{アンカウ}いづれともいひしれぬ香のうごいてくる。

【いひならはず】 ^{クダラ}くせのやうにいふ。

【どりでん】 どりだして。

【適くとして】 ^{タテ}こにもつていつても。

【美質】 ビシツよき性質。

【景致】 ケイチ おもむぎ。

一六 品性

【飽食暖衣】 ハウシヨクタンイ あきるまでくらし、あたらかにきる。

【大厦高樓】 クイカカウロウ おほいなる建物、たかきたかごの。

【弊衣粗食】 ヘイイシヨク やぶれたる

衣を着、そまつなるものをくふ。

【草屋茅舍】 サツチクバウシヤ くさやわらやなどいふことにて。(あばらや。)

【わづかに雨露を凌ぐ】 やつこのこと、あめ露をかいらぬだけにする。

【拱手】 キョウシユ 手をこまねきて、自分で何事をもせぬこと。

【願使】 イシ あごのさきて人をさしづしてつかふ。

【日夕營營】 ニツセキエイノ、あけても

くれても、いそがしくすること。
 【必しも然らざる】きつとさうしたわけのものでない。
 【完全無缺】クワンセンムケツ 十分とのひて、少しも不足なきこと。
 【尋常一様】なみひとほり。
 【素養】ソヤウ かねてまなびおぼえて、したちの出来てをるもの。
 【意を得たるもの】きにいつたもの意。
 【生活の程度】くらしむぎいほどあひ。

【標準】ヘウシュン めあて。(さだまつたかた。)
 【心事の高潔】けだかくして、けがれなきこと。
 【真成に】まことにの意。
 【助成】サヨセイ たすけなす。
 【美辭を列ぬ】たくみに、美しきことばをならべたてる。
 【私利一點】シリイチテン 自分一人の利益のみでかんがへる。
 【能を抱いて】はたらきをもつて居て。

【要路に立つ】政治上の樞要なる地位にたつ。
 【地位】チキジぶんの身のゐるところ。
 【地位を利用す】おのれのたちばをうまくつかう。
 【滔滔】タウタウ 水のはびこり盛なる如く、世の人がだれもかれも同一なるさまなること。
 【大勢を察る】世の中のおほよそのありさまをみる。(世のなりゆきをみる。)
 【威勢を有し】他をおそればから

しむるいきほひ。
 【社會に濶歩し】世の中を鷹揚なるふうつきをしてあるさまはる。(世にはばをすること。)
 【清廉の士】心けつばくにして、行正しき男子。
 【汚濁なるに堪へず】けがれたるさまに耐えられない。
 【耳を掩う】みまにふたをする。
 【標準を誤る】けんたうのつけかたをまちがへる。
 【外觀】カライクワン うはべのありさ

【下劣】ゲレバ いやしくおどりたること。
ま。

【壯大】サウダイ おほきくりつばなること。

【跋扈】バツコ をごりこゆることにて、世の中にさまゝなる行をすること。

【自然の勢】おのづから、しかなるべきなりゆき。

【諸子】おのおの方、又は諸君などいふ意。(子は年若きものにいふ語。)

【忌むべく悲むべき】いやにおもひ、かなしくおもふ。

【大勢を趁う】世のうつりかはつてゆく勢にしたがつてゆく。

【みづから期す】みづから心にあてにする。(ねがふ。)

【品評】ヒンピヤウ しなだため。(優劣の論定をなすこと。)

【制裁】セイサイ ごりおさへ。

【勢力を失墜し】いきほひをうしなひおとす。

【正大】セイダイ 心のたゞしくりつば

なるものをいふ。

【天下の風潮】フウサウ 世の中のなりゆき。

(風に従ふ潮の流といふ意なり。)

【一變】イツメン かはつてしまふ。

【一洗】イツセン あらひさつてしまふ。

【刮目】クワツモク 目をぬぐつて注意してみること。

一七 運命 其の一

【運命を左右す】身のまはりあはせを、とどまつかうせむこと、思ひまゝに動す。

【一半】イツメン はんぶんすぎ。

【暗々裏の出来事】しぜんの方によりて、もしくは人力により、われわれの眼にいらす。耳にいらす。うはへにあらはれざる間にできたること。

【生涯の望と畏】日々の出来事を、あらかじめ知ることを得たらんには、これがためにたのみにもならぬ望をねがひ、又えうもなきおそれをなすといふこと。

【無限無邊】ムゲンムヘン かぎりなき

さまをいふ。(はてしなし。)

【ダビット】 假託の名なり。

【既往】 キロツすぎさつたむかし。

【知るを要せず】 知る必要がない。

【手代】 テダイ商家にて番頭と丁稚との間につかはるゝもの。

【履歴】 リンキ人のおこない來りたるらしいき。

【事足るべし】 十分であらう。

【乗合馬車】 ノリアヒバシヤ多人數共にのる馬車。

【決意】 ケツイこころのとりさだめ。

【鬱葱】 ウツソウ こんもりとしげれるさまをいふ。

【喬木】 キヨウボク 高く大きくなる木。

【渴きたる喉を潤し】 かはいた喉をしめす。

【つぎはぎ】 つぎをあてたり、つぎあはせたりの意。

【仰臥】 キヤウグワ あふむけにねる。

【絶好】 セツカウ きはめてよら。

【蔚】 シトネ したにしくふとんのこと

【沸沸】 フッフツ 水のわきてる形容に用ゐる語。

【そよ吹く風】 そよそよとしづかにふく風。

【微揺す】 すこしくうごく。

【陶然】 タウゼン こころたのしき貌。

【恍惚】 クアウコツ うつとりとしたる貌。

【うまいの裏に落ちぬ】 こころよくねむつてしまった。(熟睡。)

【點點】 テンテン こゝかしこにちらちらめらばるゝこと。

【めき目もみらす】 見聞をもしなす。

【寓目】 シウモク 目をつけて見る。

【思念に蔽はれ】 おもひにとりふさがれる。

【心も留めず】 氣にもとめない。

【無邪氣】 ムジャキ 心にわたかまりのなきこと。(つみなぎさるま。)

【眉しかめ】 まゆにしわをよせる。

【非難稱美】 ヒナンシヨウビ しまをどがめたりほめそやしたり。

【一讚一譏】 イッサンイツキ ほめたりそしつたり。

【はでやか】 りつぱな。(華麗。)

【輕車】 ケイシャ かるき車。(走りのよ)

き車を形容していへる語。

【隣隣】リンリン 車のとらるるき行くさ
まにいふ語。

【木立】コダチはやし。(たちき。)

【突然】トツゼン うちつけなること。
(急に。)

【轄】クサビ 車輪の脱落をふせぐため
に 軸の端の穴にさすもの。

【ためつすがめつ】物をいろいろの
方面より、つくづくとみるさま。
(とみかうみ。)

【凝視】ギョウシ みつめる。

【忍足】シノビアシ おとのたうないや
うにあるく。

【低語】テイゴ こゑをひそめていふ

【氣息】キツク いきづかひ。

【容興】ヨウヨウ ゆつたりとしたるさま
をいふ。(いきづかひのやすきさま
をいふなり。)

【歳入】サイニフ 一年中にとりいれる
財産。

【惜しからじ】をしくはあるまじ。

【従弟】イトコ おぢの子。

【所行】シヨギヤウ おこなひ。

【失望】シツバツ のぞみかなはずして、
心づくしのかひなきこと。

【偶然】グウゼン おもひもよらず。(ふ
つ。)

【邂逅】カイコウ 不意にであふをいふ
(めぐりあふ。)

【熟視】シユクシ よくねんをいれてみ
る。

【面ざし】かはだち(面相)。
【面ざし】かほだち(面相)。

【逝ぎし】さきにしんだ。

【うち案じ】しあんして。

【素性】スジャウ 身分の血統。(うまれ

た家のみぶん。)

【無心に眠る】なにひとつ心におも
ふところなくねむる。

【莫大】バクダイ きはめておほいなり。

【巨萬の富】イクマンといふほどの
大いなる財産。

【目ざし】目をつける。(目がける。)

【心に適はず】氣にいらぬ。

【想像を畫く】おしはかつたおもひ
を、心のうちにおもつてみる。

【反復】ハンブク くりかへす。

【忽焉】コツエン 速なる貌。(たちま

ち。

【われに復る】もとのさまになる。

【駒々然】コウコウセン いびきのこゑをさせること。

一八 運命 その二

【頭巾】ツキンあたまにかぶるもの。

【目深に被り】^(憤)目のかくるゝまでふかくかぶる。

【粗野】ツヤ ふうつぎのあらあらしく、ひなびたるさまなるをいふ。

【汚點】ヲテンよごれたるところ。(しみ)

【徘徊】ハイクワイ うろつく。

【臍物】サウキツ ぬすみたる品。

【呬げば】ちいさなることゑいふ。

【匕首】ヒシメ 短きつばなき刀。

【胸に擬し】むねにあてがふ。

【悪魔】アクマ 善事にさまたげをなす魔の神。

【笑ひのゝしり】わらひて聲たかくさわざたてる。

【がやがや】ものさはがしくいふ語。

【うち興ず】^{キヨウ}きようにいつておもしろく感ず。

【疲勞を醫し盡せり】^{ヒラウ}つかれをなほしてしまつた。

【半残の夢を語れり】^{ハンザン}なかばのこれるゆめの間に、無意識に何かひとりごとをいふ。

【をちかた】遠きあなた。

【輪聲】リンセイ くるまのこゑ。

【殷殷】インイン おとのさかんなるさまたいいふ語。

【轟々】ソウソウ 轟々たる音をいふ。

ち。

【軋轆】^{レキロク}くるまのきしる音。

【尺寸の間】てぢかきところ。

【こや御者】^{キヨシヤ}こりや 御者の意。(こやは呼びかける語、御者は馬をつかつてゐる者。)

【上層に席あり】^{ジヤウソウ}上のだんにばしよがあるの意。

【一顧眄】^{イツコメン}ちよつとふりかへつてみる。(眄「メン」或は「ベン」ともよむ。眄とかけるは誤なり。)

【富の神】富豪夫妻を指す。

【死の神】山賊のひとむれを指す。

一九 水の聲

【杉垣の云々の歌】「杉のいけがきのしたをくゞつて、庭にながしかけたる水が、われわれの目につくところ、ちよろ／＼とながれてでて来る聲がきこえるわい。」といふ意。

【さだめなき云々の歌】「有爲轉變は世の常なりとおもひさだめて見渡せば、あさなゆふなにあらはるゝ

一四〇

雲も、またわが心とたがはずして、さだまりたる形もなくあらはれて来るわい、さては雲も吾が心をさされるにや。」といふ意なり。

【さらばとて云々の歌】「さらば」は然らばといふ意なり。さて歌の意はあふさかの關まで我が友に送られて来て、こゝにてさらばこれにておわかれ申すといつて、別れをつけていで立たんとてわが乗れる馬のたて髪には、朝風がさむく吹きつけた、逢ふといふ事を名にせる

このせきしよの跡で、われは吾が友に別れることのつらさよとなり。

【あまりにも云々の歌】あまりにきづをあらせまいとおもつてみがきたてた爲めに、をしきことをしたわい、立派な玉もちいさくなつてしまつたといふこと。

【わが袖に云々の歌】今聖駕はこの地を通御しましたが、こゝに拜觀に来て聖を拜したわが袖に、吹きかよつて来るのもおそれおほ

きことだ、あのすぎゆく聖駕を吹いてをつた風だとおもへばまあ。」の意なり。

二〇 朝鮮の風俗

【平安時代】桓武帝の都を京都に定めたまひしより、源平時代に至る間をいふ。

【酷似】コッジはなはだよくにてをる【上流社會】社會の上の階級カイクツにある人。

【下層人民】カソウツンミン 社會のした

の階級にある人民。

【延喜天曆の政治】エンキテンリヤク 延喜は醍醐天皇時代、天曆は村上天皇時代の年號にて、兩帝共に政にはげみたまひければ、この時代の政を延喜天曆の政といふなり。

【不法】フツフ 法にたがふて。(道にはづれて。)

【聚斂家】シウレンカ おもき租税をとりたてるひと。

【官省】クワンシヤク やくしよ。

【簡單】カンタン 手のかゝらないこと

【武家時代】 武家が政をとる様になつてから後の時代。(鎌倉幕府以來。)

【著流】キナガシ はかまをはかずにをること。

【悪化】アククラ めるくかはる。

【被物】カツギモノ 婦人の外出の時に用ゐる、頭より背にかけてかぶり、かほをかくすやうにしたてたる衣をいふ。

【冠物】カブリモノ 帽子笠の如く、頭にかぶるものをいふ。

【烏帽子】エホシ 古昔のかぶりものにして、貴人は冠袍クワンホウを用ゐるときに用ゐる、賤者は儀式の時に用ゐる。

【元服】ゲンブク 古昔男子十五歳に達すれば、冠を加へ髪を理すめ服をあらたむる式あり、これを元服といふ。

【輕蔑に甘んず】ケイベツニカンズ さびすみあなごりをうけるのにまんぞくする。

【弊害】ヘイガイ あしきがい。

【虚弱】キヨシヤク 身體のかよわざもの。

【滋養】シヤウ からだのやしないことなるもの。

【啜る】スズ すうてのむ。

【臆勝】オウセツ はらわた。

【類似】ルキジ によりたるところ。

【畢竟】ヒツキヤウ ついまり。

【摸擬】モギ まねをする。

【固有の國民性】 もとからある、國民の特別なるうまれつき。(國民の特別なる性格。)

【發揮】ハツキ あらはし出す。

【保存】ホソン もちつゞける。

【研究材料】ケンキウザイレウ みがききはめてあきらかにするもごとくなるべきしな。

【同化】ドウクワ 舊智識が新智識を融合して、自分のものとしてしまふこと。

【懇篤】コントク ねんごろにあつし。

【誘導】イウダウ いざなひみちびく。

【立派な人物】リツパ 尊敬する程の、えらい人物といふ意。

二二 金吾秀秋

【むねと】ムネト 宗徒とかく、主としてたのみにするもがらの意。

【引き具す】ヒキグヒス つれてゆく。

【其勢】ソノセイ その軍勢の意なり。

【後卷】ウシロマキ 攻圍軍を更に其後よりかこむこと。

【わが手にかけて】ワガテをくたしての意。(わが手を以て。)

【馬武者】ウマムシヤ 騎馬の兵。

【御感なごめならず】ゴカンしんあそばすことが、ひととうりでないの意。

【ゆゝしく】ユヅク えらいと云ふ意。

【さりながら】サリながら さうではあるが。

【代官】ダイクワン 名代の意。

【事の體】コトノテイ このありさま。

【輕卒】ケイソツ かるがろし。

【かたき】カタキ 敵兵。

【振舞】フルマヒ しむぞ。

【しかるべからず】シカルベからず ちやうなことはよろしくない。

【仰せ下さるべうもや候ふ】「仰せ下さるべうもや候ふ」かと思得まふ。ウラサマイカ。

【御けしき】ゴケシキ ごやうす。

【籠め置き】カゴメオキ あつめていれておくこと。

【七人の軍奉行】イクサノギヤウ 太田一正、熊谷直盛、早川長政、寛和泉守、福原長堯、竹中伊豆守、毛利高政の七人の奉行をさす。

【参りつごひ】サンリツゴヒ あつまり来る。(参集)

【凱陣】ガイジン いくさにかつてかへること。

【對面】ダイメン 相見ること。(對顔。)

【感じ申す】カンジマウ カんしんをして申しあ

げた。

【いやいや】否々なり。(さうでないの意。)

【かへすがへす】どうかんがへてもの意。(かざるねがさね)

【後悔に思ふ】失策したとてごんねんにおもふこと。

【聞きもあへず】聞きもをばらず。

【幼弱】エウツヤク 年のゆかぬこと。

【辭し申さずはあるべき】「ごじたい申さないでをられやうか、ごじたい申す。」云ふこと。

【追討】ツキタツ 賊徒征伐のためにしむける討手。

【口惜しけれ】ごんねんである。

【不覺】フカク 油断して失策すること。(怠りてだしぬかること。)

【御憤を散せられんやうにはからふべし】おはらだちをおはらしあそばすやうにせよの意。

【大殿】オホトノ 古昔貴人の當主の父の尊稱。(秀吉をさす。)

【御氣色】ミケシキ ごやうす。

【御館に歸し入れ】館は貴族の邸宅

の稱。(おやしきへおかへし申せの意。)

【しやくび】しやくの首にて、「そやつ

の首の意。(のしりていふ語。)

【うち刀】腰にさす刀。(太刀に對していふ。)

【どかく制して】なにはともあれむりにおさへつけて。

【尼孝藏主】アマカウザウス 奥女中の常務を解き、髪をおろして宮仕する者、内外男女の間に立ちて紹介するを役とす。孝はこの女の名なり。

【申し條】申したしだい。

【奇怪の至】きはめてけしからぬことじやの意。

【すべからく】「せひ」にの意。

【尼前】アマセ 尼御前の略稱にて、尼となりし人に對する敬稱なり。

【おつかへさる】おひかへされたの意。

【内府】ダイフ 家康を指す。(家康時に内大臣なりければかく云ふなり。)

【御はからひにこそより候ふ】「おとりさばぎにばかりよるのでござい

ます」の意。

【政所】マンドコロ 秀吉の正室なり。

(攝政關白の妻を、宣旨を下されて北のまんごころといへり。)

【とにかくにも】何にせよ。(どうであらうとも。)

【あらまほしけれ】ありたいことじや。

【歎かせたまはんには】歎願をなさねてあらうには。

【そのみは】それはなには。

【つよくはおはせじ】心づよらこと

はおほせらるまい。

【仰せらるべきやうもなく】おしかへして仰せらるべきことばもなく

【家人】ケニンけらい。

【外様】トザマ代代つかへたものにあらざる、後に召し抱へた士。

【國遷されんこと】國がへをされやうこと。

【いたはしう覺えて】おかはいさうに思うて。

【えこそ申しだし侍らね】「え申しださずにをります。」の意。

【任せ参らすべし】おまかせ申さう。
【饗宴の儀】もてなしのさかもり。
【引出物ひかる】饗應の時主人よりおくりものをすること。

【芳恩】ハウォン あついでおん。

【いづれの時にか忘れ候はん】「いつの時になつたらわすれやうかいつまでわすれはせぬ。」の意。

【報いまるらす云々】ごおんがべしをする時がございませうの意。

三二 桃山時代の工業

【内野】古昔の大内裡の址なればしか云へるなり。今は京都市街の一部となれり。

【聚樂第】シユラクダイ 秀吉の築きし所。

【大土木】大なるふしん。

【貔貅を叱咤し】猛將勇卒を、舌うちしてごなりたてること。

【韓の八道】朝鮮八道即ち京畿、忠清全羅、慶尙、咸鏡、平安、江原、

黄海の八道をさす。

【蹂躪し】ふみにじる。

【豪邁の氣象】ガウマイ キシヤウ 心たけくすぐれたる氣象。

【壯觀】サウクワン 壯大なるみもの。

【桃山の式】トウサンノシキ 桃山のかた。(桃山風。)

【長押】ナゲシ かもゐの上に横にわたしたる材。

【鴨居】カモキ 戸障子などたてるために設けたる上方の横木。

【襖】フスマ 今の唐紙のことなり。

【そのかみ】ソノカミ 當時。

【意匠】イシヤウ 思をめぐらしてかんがへること。

【門扉】モンヒ 門のとびら。

【一斑を窺ふべし】ワカバシ 一部分を知ることがができる。

【調度】テウド 道具といはんほどの意なり。

【名工輩出】メイコウハイシユツ 名ある工人の相ついで出づること。

【元和以來】ゲンナイライ 元和のことなり。(元和は徳川氏幕政の始めころの年號なり。)

【恩顧】オンコ あつきいつくしみをうけたること。

【時代の風尚】フウシヤウ 時代のこのみ。

【遺風】キフウ のこれるさま。

【別天地】ベツテンチ 世間とはなれたるところ。(他と異なる地。)

【象眼】ザウガン 銅鐵等の器に模様をほりこみて、金銀などはめこみたるをいふ。

【賞翫】シヤウグワン めでもてあそぶ。

一三三 職業の選擇

【肅啓】シユクケイ つしんで申し上ぐるごいふこと。

【令弟】レイテイ 人の弟をさしていふ語。(おとうと子様の意。)

【一喜一憂】イツキイツウ よろこんだりうれひたりの意。

【虚榮心】キョエイシン まことなき榮譽をむさぼる心。

【拘はらず】カウハラス かまはず。

【白馬金鞍連】ハクバキンアンレン 白き馬に金の鞍をおいて跨り、酒樓などに出かけける貴族的少年輩をさす

【群議】グンギ 多く人々のぎろん。

【斷じて】ダンジテ おもひきつて。

【直截】チヨクセツ たゞちに事をとり
さめる。(直覺的に截斷すること。)

【敢爲】カンキ 物事をおしきつてする
こと。

【些の屈折】サツセツ いさゝかの物事に生ず
る「あや」。

【心事高尚】シニシ れうけんがけたかきこ
と。

【求むる所あるなし】自分の心をま
げて、人に氣にいられやうとする
ところがない。

【屈折變化】クツセツ ヘンクワ物のあや、

うつりかはり。

【才能の誤用】チヨウノウ 智慧はたらきま
がった方面に用ゐる。

【到頭】タウドウ 遂にの意。

【準備】ジュンビ したごしらへ。

【一時の發憤】ハツペン いつとぎの心のふる
ひたつ。

【促され】ウナガ せきたてられる。(せつか
れる。)

【結果】ケツカ ことつまり。

【果して然らば】きつとそれに相違
なくば。

【放擲】ハウテキ なげすてる。

【然るべく候】「まからう。」の意。

【つらつら】よくよくねんをいれて。

【運命】しせんのみまはりあはせ。

【先天】此の世にうまれでぬものよ
り。

【功勞に酬いざるべし】はたらきか、
ほねをりにむくいるだけに至らな
いであらう。

【老兄】人を呼ぶ尊稱。

【冷靜】レイセイ 物事にあはてずおち
ついてしづかなること。

【禍福に關す】さいはいか、ふしあは
せかにかゝはる。

【直言不諱】チヨクゲンフキ かざりなく
又憚るところなくものをいふこと

二四 南京の壺

【さる町内】「或る所の町内に」の意。

【婚禮振舞】コンレイフルマヒ 新婚ひる
うの饗應をいふなり。

【年寄】町年寄のことなり。(町村の
長たりし役の名。)

【町役】チヤウヤク 町役人のこと、名

【直截】チヨクセツ たいちに事をとり
きめる。(直覺的に截斷すること。)

【敢爲】カンギ 物事をおしきつてする
こと。

【些の屈折】サ クッセツ いさゝかの物事に生ず
る「あや」。

【心事高尚】シニ れうけんがけたかきこ
る。

【求むる所あるなし】モトメル 自分の心をま
げて、人に氣にいらぬやうとする
ところがない。

【屈折變化】クッセツヘンクワ 物のあや、

うつりかはり。

【才能の誤用】チノウ 智慧はたらきを、まち
がった方面に用ゐる。

【到頭】タウドウ 遂にの意。

【準備】ジュンビ したごしらへ。

【一時の發憤】ハツジツ いつとぎの心のふる
ひたつ。

【促され】ウツナガ せきたてられる。(せつが
れる。)

【結果】ケツケ とりのつまり。

【果して然らば】ケレバ きつとそれに相違
なくば。

【放擲】ハウテキ なげすてる。

【然るべく候】シカドコ 「よからう。」の意。

【つらつら】ツラツラ よくよくねんをいれて。

【運命】ウンメイ しせんのままはりあはせ。

【先天】センテン 此の世にうまれでぬことよ
り。

【功勞に酬いざるべし】コウロウニウラヒ はたらきが、
ほねをりにむくいるだけに至らな
いであらう。

【老兄】ラウセイ 人を呼ぶ尊稱。

【冷靜】レイセイ 物事にあはてすおち
ついてしづかなること。

【禍福に關す】カフクニカケル さいはいか、ふしあは
せかにかゝはる。

【直言不諱】チヨクゲンフキ かざりなく
又憚るところなくものをいふこと

二四 南京の壺

【さる町内】サルチヨウ 「或る所の町内に」の意。

【婚禮振舞】コンレイフルマヒ 新婚ひろ
うの饗應をいふなり。

【年寄】トシヨシ 町年寄のことなり。(町村の
長たりし役の名。)

【町役】チヨウヤク 町役人のこと、名

主五人組などを云ふ。

【家持】家主の意。(おほや。)

【馳走】チサウさまさまかけまはりて用意をしたるもの。(盛饌。)

【笹の露】ひとしづくの酒といふ意。

【下戸】ゲロ 酒ののめぬ人の稱。

【退屈】タイクツ うみあくこと。

【亭主方】主人がはのものをいふ。

【南京の古染附】南京のあををとも

いひて、藍色にやとつけたる磁器

をいふ。

【大輪の金米糖】大粒の砂糖とがた

をいふ。

めたる菓子。

【ひらに】なにとぞの意。

【突つこみしな】つつこむそのをり

の意。(つつこみがけ。)

【ましむ】すれあひてなめらかなら

ぬこと。

【撮み】指にてつまむこと。

【こじまはす】ねぢまはすこと。

【まごまご】まごつくさまをいふ。

【真顔】マガホまじめなるかほつき。

【無理無體】ムリムタイ しひての意。

(やたら無法に。)

【えいや】力を入るゝ時のかけごゑ。

【景清】平家の大將悪七兵衛景清の

こととなり。

【美保谷】ミホノヤ 源氏の大将美保谷

十郎のことなり。

【鍛曳】シコロビキ 景清が十郎の鍛を

つかみてひきもごさんとすれば。

十郎はひきもごつて逃げんとする。

其時のさまをいふなり。

【骨接】ホネツギ 整骨醫のこと。

【興】キヨウ おもしろみ。(たのしみ。)

【五人組】五人を一組としたる組合

のもの。

【司馬温公】シマチンコウ 宋人なり。

宋の神宗の樞密副使に任せられた

る人。

【はまる】おちこむこと。(陥る。)

【不思議に】おもひはからずも。

【難澁】ナンシツフ なんぎくるしみ。

【しかつべらしく】もつともらしく。

(然か有りつ可くの意。)

【何がさて】なにはともかく。(なに

はなしに。)

【片意地】カタイヂ わが意をたてゝ人

に従はぬこと。(執拗)

【大安樂】ダイアンラク おほいに心やすきこと。

【器量】キリヤウ こゝは容色の意に見るをよしとす。

【負惜】マケナシミ まけたるをくやしがりて強情をはること。

【家柄】イヘガラ たつとさいへすぢ。

【身代】シンダイ 身についた財産。

【せん方なさ】しやうかたなしに。

【癩氣】シヤツキ しやくのやまひ。(腹部に癩癬を起して、痛みて人事不

さつたことはない。

【明日】メイタン あくる日のあさ。

【陳謝】チンシャ あやまりわびをすること。

【讒言】サンゲン 事實を虚構して、他人をあしざまにいふこと。

【東嚮】トウキヤウ ひがしむきをすること。

【目くばせ】目をうごかして意を通ずること。(目にて知らず。)

【玉珎】ギョクケツ 玉の環の如くにして連らざるもの◎の如し。(決意を

省になるやまひ。)

【紛し】マギラ 心を轉すること。

【詮なし】しかたがなし。(かひなし)

二五 鴻門の會

【行く行く】ゆきながらの意。

【略す】せめとること。

【志小ならず】志が天下を一統せんとするにあるの意。

【謀臣】バツシン 參謀となれる臣。

【不義】フギ みちならぬこと。

【遇せんには如かず】待遇するにま

示すなり。)

【默然】モクセン だまつてものをいはぬこと。

【壽をなし】いはひのことばをのべる。

【意沛公にあり】おもはくは沛公をうち取るにありの意。

【盾を擁し】たてをひつかへて。(盾は矢丸を防ぐに用ゐる。)

【衛士】エイシ 門衛の軍卒のこと。

【目を瞋し】目に角を立て、勢をたつること。

【目毗】コクシまなじり。

【壯士】意氣のさかんなる男子。

【斗卮の酒】容量一斗をいゝるさかづきのさけ。(卮は四升入の酒器の稱。)

【生屍の肩】なまの豕肉のかた。

【俎】ソまないた。

【辭するに足らん】ごゑんりよ申さうか、遠慮は致さない。

【虎狼の心】虎や狼のやうに残忍貪慾なる心。

【侵すところなし】かすめとるところ

ろがなし。

【封閉し】封印をつけてしめきる。

【非常に備へ】常ならざる異變に用意する。

【封侯】ホウコウ土地を與へて大名にする。

【亡秦の類】既にはろんだ秦國のたぐひ。

【廁】カハヤてぶづば。

【いまだ辭せず】まだいとまごひをしない。(あいたつをしない。)

【大行は細謹を顧みず】大事をなさ

んとするものは、ちいさなるつゝしむべきことを、とんちやくしてはをれぬ。

【大禮は小讓を辭せず】大なる禮儀には、小な謙讓をなさずといふこと。

【刀俎】タウソ庖丁やまないた。

【猶豫】イウヨぐづぐづして時をのばすこと。

【酒量】シユリヤウさけをのむ力といはんが如し。

【白壁一雙】イツサウしろぎたまいつゝ。

【足下】ごへん、又はさみなごいふこと。

【玉斗一雙】ギョクトイツサウ玉にてつくれる酒をくみとる柄杓をいつつ

い。

【堅子】ツヰシこのこぎょうといふことにて人をのしつていふ意。

【與に謀るに足らず】共に物事の相談のできる人物でないの意。

【項王の天下】項王のとるべき天下の意。

【目毗】 ヨツシまなじり。

【壯士】 意氣のさかんなる男子。

【斗卮の酒】 容量一斗をいれるゝさか

づきのさけ。(卮は四升入の酒器の

稱。)

【生彘の肩】 なまの豕肉のかた。

【俎】 ソまないた。

【辭するに足らん】 ごゑんりよ申さ

うか、遠慮は致さない。

【虎狼の心】 虎や狼のやうに残忍貪

慾なる心。

【侵すところなし】 かすめるところこ

ろがなし。

【封閉し】 封印をつけてしめきる。

【非常に備へ】 常ならざる異變に用

意する。

【封侯】 ホウコウ 土地を與へて大名に

すること。

【亡秦の類】 既にはろんだ秦國のた

ぐひ。

【廁】 カハヤてふづば。

【いまだ辭せず】 まだいとまごひを

しない。(あいたつをしない。)

【大行は細謹を顧みず】 大事をなさ

んとするものは、ちいさなるつゝ
しむべきことを、とんちやくして
はをれぬ。

【大禮は小讓を辭せず】 大なる禮儀

には、小な謙讓をなさずといふこ

と。

【刀俎】 タウソ 庖丁やまないた。

【猶豫】 イウヨ ぐづぐづして時をのば

すこと。

【酒量】 シュリヤウ さけをのむ力とい

はんが如し。

【白壁一雙】 シロカキイツサウ

【足下】 ごへん、又はさみなごいふこ

と。

【玉斗一雙】 キョクトイツサウ 玉にてつ

くれる酒をくみとる柄杓をいつつ

い。

【堅子】 シュシこのこざうといふこと

にて人をのゝしつていふ意。

【與に謀るに足らず】 共に物事の相

談のできる人物でないの意。

【項王の天下】 項王のとるべき天下

の意。

訂修 中等國語讀本卷之四終

明治四十五年四月五日印刷
明治四十五年四月十日發行

正價金二十錢

教育研究會編

編纂者 兼 東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地 西村寅次郎

印刷者 東京市芝區愛宕下町二丁目五番地 牛坂三郎

印刷所 東京市芝區愛宕下町二丁目五番地 邦文社

發行所

東京市京橋區南傳馬町三丁目 東雲堂書店

電話京橋一六三九番
振替東京五一四番



270
72

